

Presented By

POPO DYLAN

『風に吹かれて』

Kaze Ni Hukarete

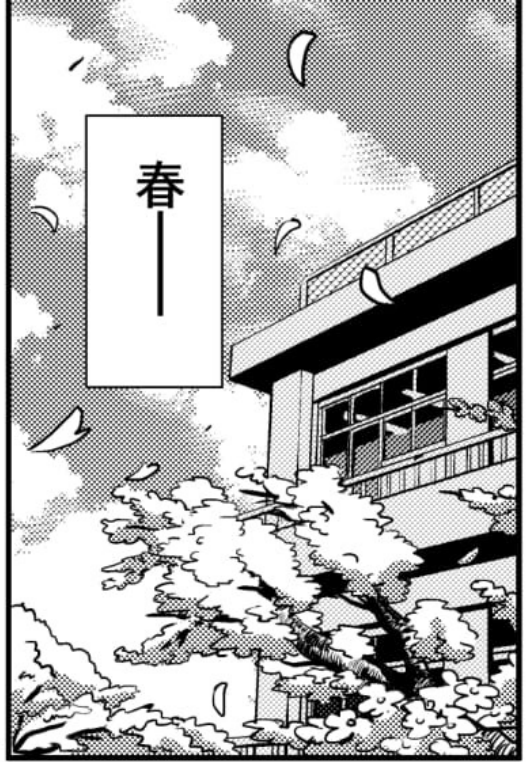


成人向け | ADULTS ONLY
18歳未満の購入・閲覧禁止



ボタ君
部活行こう
ぜえ

新入生の
仮入部が盛んに
なるその季節



春



よし…

ぼの ゆうじろう
慕野 裕次郎
愛称:ゆーちゃん

少年は
ボタという
男の子の存在に
心奪われていた



もう行った
かな…



コイツの乳
マジで女みてえ
なんだけど

つかコイツ
触ってもチンコ
ねえしな



その時
少年は恋慕う
存在が

クラスメイト
から辱めを
受ける姿を
見て



性的興奮を
覚えていた…



憤怒や嫉妬
という感情
よりも先に

うわっ
コイツ感じて
勃起してるし

やっ

ゆーちゃんの想い人
ふゆうり
冬瓜 ポ夕

少年は――



ボタ君が勃起
ボタ君が勃起
ボタ君が勃起
……



……
見てみたい
ボタ君の

先ほど
目の当たり
した光景を――

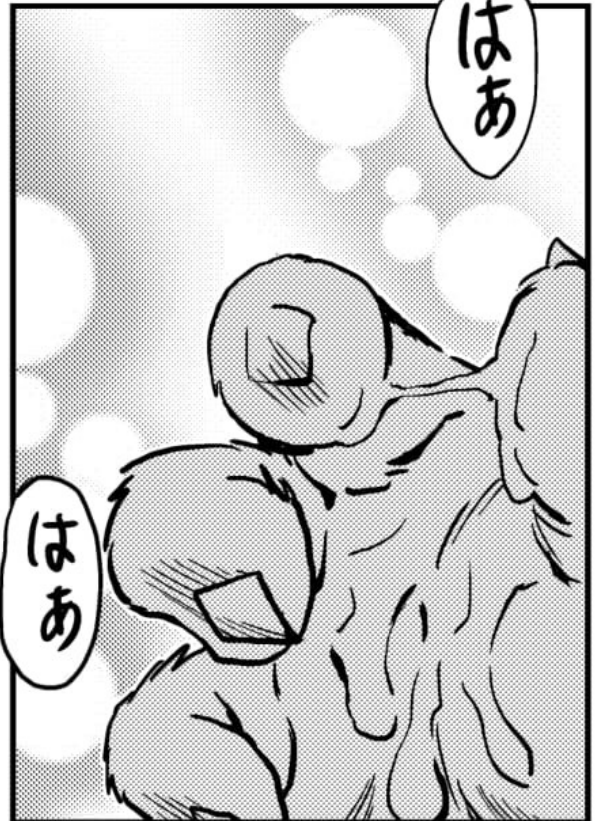


繰り返す
何度も

頭の中で
蘇らせた



身を鎮めた
我に戻った
が



若葉たちの空に「恋はみずいろ」

文・もけ 原作・ぽぽん・パペオン

目覚まし時計の液晶は夜の10時半ごろを指していた。寝返りを打ちながらチラリとそれへ視線を向け、きちんとアラームがセットされているのか再び確認した。

液晶の右下には『AM5:30』とアラームの設定時間が小さく表示されている。これで明日の朝は問題なく起きれるだろう。

天井を見上げながら仰向けに寝転がる。静かで快適な寝室だった。

彼——白い毛皮を纏い恰幅の良い体をした虎獣人の青年、慕野裕次郎は、そうしみじみ思った。

慕野は今、実兄との折り合いの悪さもあって、学校の近くのアパートへと引っ越して一人暮らしを満喫していた。

生活を自分で管理する必要もあるし、折角の休みにアルバイトで水を差さなければならぬことも大変ではあったが、無遠慮な家族がノックもせず部屋へ侵入してくる心配も、顔を合わせるたびに険悪な空気になる相手と鉢合わせる心配もない生活というのは、一度味わえば手放したくない環境だった。

それに……、と慕野は目を閉じながらむふふとニヤけ面を浮かべる。

瞼の裏に、同じ学年の男の子を思い浮かべる。控えめで物怖じしやすい性格をして、黒髪とふくよかな体を持ったパンダの少年。

この新しい環境の中で、彼にとって何よりも輝いている存在だった。続けるつもりはなかった卓球も、彼と同じ部活だからという理由で、結局今の学校でも続けている。

ボタ君、と口の中で呟いた。目を閉じて眠りにつこうとしていたし、実際かなりとうとうとしていたのだが、その少年のことを考えているとどうにも息が荒くなった。

「はあ……ッ」

落ち着かない気分になってゆくのを感じながらも、明日はその続ける予定もなかった卓球部の地区大会である。

レギュラーでもないのだからやる事といえば応援ぐらいであるし、それもあってモチベーションはそこまで高くもなかったが、早起きして出発することを考えれば今は早く寝てしまった方が良さそうではあった。

ムラムラした気持ちを払うように再び寝返りをうち、枕に顔を埋める。同時にいつの間にか股間で膨らんでいたそれがベッドへと押し付けられた。

小さく腰を震わせながら、ベッドの横に置かれたゴミ箱と机の上のティッシュ箱を交互に眺める。白い体毛に包まれた頬を微かに赤く染めながら、熱の籠もった吐息を漏らした。

「その方がよく眠れるだろうし……」

そんな風に自分への言い訳の言葉を呟きながら、ゆっくりと体を起こす。背伸びするようにしながら机の上のティッシュ箱に手を伸ばして脇に置くと、ベッドの上に座り込みながら自らの股間をトランクスの上から撫でる。

固く勃起したそれによってテントが貼り、先端には先走りの液体が滲んでいた。浅く早い呼吸を繰り返しながらトランクスをずらし、肉棒を露出させる。元から寝るときは下着のみだったから、その気になればすぐ始められた。

右手で肉棒を触りつつベッドの脇で充電器につながれたスマートフォンへと左手を伸ばす。すぐに画面を起動して画像フォルダを開

く。薄暗い室内が画面からの光でぼんやりと明るくなった。

想像だけで息を荒くしながら目当ての画像を開く。

『コイツの乳マジで女みてえなんだけど』

脳裏にそんな言葉が響く。

画面に映るのは、クラスメイトに後ろから胸を鷲掴みにされ、戸惑い困っているボタの写真。それを見ているだけであの時の会話が頭の中に蘇った。

ふくよかな胸を揉みしだかれ、本人も気にしているらしい股間のその小さな笑われ、その辱めに顔を真っ赤にしながら慌てている時の姿。

想いを寄せる相手がそんな扱いを受けているのだから止めに入るのが筋だったのかもしれないが、慕野がとった行動はその様子を写真に収めることであつた。

「俺ならもっと、優しく……ッ」

出来ることなら自分もそうやってボタの胸をまさぐり、その柔らかさを確かめてみたかつた。

あんな配慮にかけた乱雑な手つきではなく、ちゃんと気持ちを入れて優しく揉んでやれるのに。

画面に映るボタの見せる戸惑いと恥辱の表情が、堪らなく艶かしい。柔らかな胸が荒々しく鷲掴みにされ指が食い込む肉感に、思わず口の中によだれさえ溜まる。

この写真を撮った時、胸を揉まれるうちに彼自身の小さめのそれが勃起していたらしい。それを想像するとさらに興奮が高まった。

自分が胸を揉んだとしても、同じように感じて勃起してくれるだろうか。その様子を頭に思い浮かべるだけで鈴口から先走りが溢れ出す。

高まる興奮と同調するように肉棒を抜き上げる手の動きが速さを

増した。背筋の体毛がぞわぞわと逆立ち、長い尻尾がびくと震える。

「ボタ君……ッ」

その興奮が限界まで高まった瞬間、気づけば慕野は想い人の名を押し殺した声で口にしていった。

それと同時に、彼の太柄な体がビクンと大きく震え、柔らかな腹が大きく揺れる。そしていきり立ったイチモツから勢いよく精液が発射された。

「あ……！」

絶頂の中で、慌てながら鈴口を右手で覆う。今から自分で飛び散らせた精液を掃除したくもなかった。

手のひらの中に熱い精液が溢れるのを感じながら、絶頂の快感に腰を小さく震わせる。

「ふう……、またやっちゃった」

快感の余韻に浸りながら、慕野は荒くなった息を落ち着けるように小さくため息を吐き、そう一人ごちた。

自らの精液でベトベトになった右手と股間をティッシュで拭き取ると、丸めてからゴミ箱の中に投げ込む。

スマートフォンを充電器に再びつなぎ、目覚まし時計で時間を確認すると、再度仰向けに寝転がる。

なんだかオナニーを終えると、今まで感じていなかった分までドツと疲れと眠気が押し寄せてきたような気がした。

天井を見上げながら大きくあくびをする。意識して目を閉じるまでもなく、重たくなった目蓋がすんと降りてきた。

うとうとと意識が夢の世界に誘われていくが、完全に眠りに落ちる間際、それを遮る音が響く。

——ピンポン

玄関の呼び鈴が鳴る音だった。こんな時間に非常識な来客だと、

再び大きくあくびをしながら目元をこすった。

眠気に支配された緩慢な動作でベッドから起き上がろうとしていると、続けて呼び鈴が鳴り響く。

——ピンポーン、ピンポーン、ピンポーン、ピンポーン

まるでいたずらでもするかのように繰り返し鳴り響くその音に、さすがに眠気も多少覚めて来る。

「あれ、でも……」

イライラしながらも玄関へ向かおうとしたあたりで、彼はそう呟いて足を止めた。

部屋の中が静かだったせいではっきりと聞き取れたが、それにしても普段聞こえる呼び鈴よりもだいぶ音量が小さい。

もしかして隣の部屋への客だろうか、今も鳴り続けるその音への不快感で眉間にしわを寄せながら考える。

そしてどうやら合っているらしい。

「ッ——！！——っ！」

部屋の向こうから意味まではわからないまでも何か叫ぶような声と、続けて乱雑にドアを開く音、部屋へとなだれ込む数人の靴音までも聞こえてくる。

騒がれでもしたらちゃんと寝付けようかと不安を感じながら、重い足取りでベッドへと引き返した。

しかし嫌な予感というのは的中するものらしく、再び横になってうつらうつらと始めたころ、向こうも盛り上がってきたらしい。

「ッ——！！——」

相変わらず壁を隔てて意味を聞き取れない程度にはなっているが、それでも睡眠を妨害するには十分な音量の騒ぎ声が室内へと伝わってくる。

声だけではなく、ドタドタと室内を動き回る足音に、時折何かか

壁にぶつかるとような音。

正直隣の部屋に怒鳴り込んでもう少し静かにしろと叫んでやりたかったが、土日のアルバイトを生活の足しにつつも未だ親のスネをかじる身である。アパート内でのトラブルを起せば保証人である両親にも迷惑が行ってしまうだろうかと思えると、どうにも二の足を踏んでしまう。

加えて、眠くてたまらない時にあんなに騒がれてしまうと、怒る気力すらげっそりと萎えて疲れが押し寄せてくる。

慕野は大きくため息を吐くと、耳を伏せ布団を頭までかぶる。騒ぎ声と足音もこれで多少はマシになるだろうかと思いつつ目を閉じた。

だが、もう少しで眠れそうなのほど意識が飛んだかと思えば、壁の向こうから聞こえる物音にたたき起こされて体がびくりと震える。その繰り返しをしながら時間が刻々と流れていた。

イライラを募らせながら布団から顔を出して時計を見ると、時刻は12時を過ぎていた。本当ならば2時間は早く寝ていたのにと考えると、頭に血が上るのを感じずにはいられない。

再び布団の中に潜り込んで体を丸め、早く静かになれ、早く静かになれ、と念仏のように頭の中で繰り返すが、効果はない。それどころか、どうやら逆効果だったらしいと理解させられる。

——ヒュー

風切り音が僅かに聞こえたかと思った次の瞬間、ぱんっと何かの弾ける音が響き渡る。

思わずびくつきりしてベッドから転げ落ちそうになりながら慌てて周囲をきよろきよろと見回していると続けざまにその音が鳴り響いた。

「え、嘘だろ……」

——パパパパパパッ

正直考えたくなかったが、どうやら室内でロケット花火を飛ばしているらしい。断続的な破裂音が響き渡る。それはさすがにアパートの大家から怒られるのではないのか。

というかここまでやるような人たちだとすれば、今から注意しに向かったところで騒ぎが収まるどころか逆効果になりかねない。眠れないままに時間はどんどん過ぎてゆく。

試合には出ないとは言え、一日中応援席に立って声を張り上げるというのも中々の重労働である。用心して早寝することを諦めても、さすがにそろそろ寝なくては明日がづらい。だが、寝かせてくれない。苛立ちと焦燥と体の疲れに不快感ばかりが高まってゆく。ロケット花火を打ち尽くしてもバカ騒ぎが終わる様子はなく、眠れもしないまま時間ばかりが過ぎてゆく。

午前2時を過ぎても全く騒ぎが収まる様子はなく、もうどうすればよいのだと諦めの境地で目を閉じていると、不意に打開策が彼の頭にひらめいた。

「そうだ！」

ベッドから降りて部屋の電気をつけると、カバンのポケットをまさぐってネコ科の耳用のイヤホンを取り出す。充電器につないだままのスマートフォンにその端子を差し込むと、動画サイトを開きなるべく曲調の穏やかそうな曲をチョイスしてリピート再生に設定した。

いくら穏やかな曲でもイヤホンの音量を大きくするとさすがに気が散るが、それでも不規則なバカ騒ぎの音に比べればだいぶ良い。

騒ぎ声も物音も、耳元で鳴り続ける音楽にかき消されて気にならない。これでようやく眠れそうだとほっと胸をなで下ろしながら部屋の明かりを消し、横になる。

ようやく眠りにつけるというところになって初めて、自分がどれだけの疲れと眠気に襲われていたかが分かった。体が鉛のように重く、寝返りを打つ暇すらなく慕野はすとんと眠りに落ちていた。

×××

カーテンの隙間から朝日が差し込んでいた。明るくなった部屋の中で薄らと瞼を開きながら、慕野は少し困惑したように声を漏らし、おかしいなと思案顔浮かべる。

目覚ましが鳴る前であれば空はまだ暗いはずである。大きくあくびをしながらそのことについて少しの間思案したあと、彼は巨体を勢いよく動かしてバツと起き上がった。

「えええええええっ！」

呻くように声を上げながら時計を見ると、時刻は6時25分を指している。予定の集合時刻は6時30分。急速に目が覚めてゆくのを感じると同時に、耳元に響き続ける大音量の音楽に気づいた。

目覚まし時計の画面の右下には、変わらずアラームの予定時刻が表示されており、そこに間違いはなかった。とすると、アラームが鳴っても気づかず眠り続けていたのかもしれない。

イヤホンを外しながら、確かにアラーム音などこの大音量にかき消されてしまいそうだと顔をしかめる。

就寝前とは打って変わって静かな壁の向こう側を恨めしそうに睨みつけたあと、彼は水浴びのような短いシャワーを済ませジャージに着替えると、昨日のうちから買っていたおにぎりサンドイッチを冷蔵庫から取り出してカバンに詰め込む。

ドライヤーもかけないまま大急ぎで部屋から飛び出すと、自転車に跨って駆け出した。

信号での停止の合間にスマートフォンで時間を確認し、その度に額に冷や汗が滲む。

焦燥感に突き動かされながら、今までで最高速が出ているのではなからうかという勢いで自転車を疾駆させ、駅の駐輪場に乗り捨てるように自転車を置いて集合場所へと走る。

駅の入口の方に見えるジャージの集団へと向けて走りながら、再び時間を確認すると10分の遅刻となっていた。息を切らせながら集合場所へと走り込むと、腕を組み仁王立ちをした顧問の教師が待ち構えていた。

眼鏡で際立った目つきの悪さと、猪の獣人ゆえの荒々しさを感じさせる顔立ちも手伝って、遠目からも十分な迫力を放っている。

「おせーぞ慕野！ どんだけ待たせりゃ気が済むんだ！」

かなり苛立った様子の口調で雷を落とされ、咄嗟に体が萎縮してしまう。慕野の耳が伏せられ、尻尾がピンと硬直した。

「すみませんっ！ 寝坊して遅れてしまいましたっ！」

何か適当な遅れても仕方のない理由をでっち上げてしまえば良かったのかもしれないが、その剣幕で責め立てられる威圧感に口が滑ってしまう

「あのなあ慕野、あんだだけ早めに寝とけって言ったろ？ あ？ それに朝はまず『おはようございます』だよな。だろ？」

慌てて顧問へと朝の挨拶を行いながら頭を下げる。そのいかにも焦りまくった態度が逆に相手の熱を冷ましたのか、顧問は大きな鼻をフンツと慣らし呆れたように笑うと、早く切符を買ってくるよう慕野に指示した。

先輩部員たちからの、夜遅くまで何してたんだと下ネタ混じりにあざ笑う声や、遅刻への非難、部活へのモチベーションが低いのではないのかと疑う声などの野次を背中中で受け止めながら、券売機へ

と走る。

昨日の夜からろくなことが起きない。気が重たくなるのを感じながら切符を購入していると、背後で顧問教師の声が聞こえる。

「慕野が遅れて間に合わなかったから、次の54分発の行くぞ。つかかえないよう順番についてこい！」

遅刻したことは悪かったが、そうわざわざ名前を出して重くのしかかる責任を意識させないで欲しいものだ。

踏んだり蹴ったりの状況を考えて目頭が熱くなるのを感じながら、切符を手に取り集団へと引き返す。

顧問を先頭に、女子部員の集団、続いて女子に比べ人数の多い男子部員が先輩たちから順に改札へと向かっているとところだった。最後尾に、こちらへと向けて手を振る少年がいる。

「ゆー君おはよう！」

彼はそう言いながら笑顔を浮かべた。少し気弱な印象を受けるが、とても穏やかで柔らかな魅力を持った笑顔。慕野の想い人である冬瓜ボタだった。

「あ、ボタ君おはよう……」

その笑顔を向けられるだけで気持ちが高揚してしまうが、それに反して疲れた声が漏れる。正直睡眠時間が短かった上に眠りも浅く、どうにも疲れが抜けきらない。

「寝坊なんて珍しいね」

「う、うん。なんだか隣の部屋の人が宴会でもやってたみたいで、その音で全然寝付けなくて」

思い返すだけで忌々しさに怒りがこみ上げてくるようだった。

目の前の少年が、それを癒すように優しくゆったりとした調子で言葉をかけてくれる。

「そっかあ。一人暮らしもそれはそれで大変なんだねえ」

「うん。なんかもう、部屋の中で花火してる音まで聞こえてきてさ」
「ええ、部屋の中で花火い？」

肩を落としてそう話しながら改札をくぐってホームへと向かう。
困惑しながら声を上げるポタの姿が愛らしい。

電車はどうやら快速の通過待ち中らしく、まだ発車時刻まで余裕があるうちからホームに停車していた。

先輩たちが別の車両に続々と乗り込んでゆく様子が見える。慕野とポタの二人も、座席に余裕のある車両を見繕って乗車した。

ポタを窓際に二人がけの席に並んで座る。体格の良い二人が並ぶのだから当然腕や脚が密着してしまう。慕野がなんとか赤面しそうになるのを堪えていると、その様子に何か別の解釈をしたらしいポタが穏やかな口ぶりで話しかけてくる。

「着くまで1時間もあるらしいし、ゆー君疲れているみたいだから今のうちに寝ておきなよ。着いたら起こしてあげるね」

「あ、ありがとう。助かるよ」

実際疲れていることも寝足りないことも確かだったからその申し出は嬉しいが、素直に寝息を立てるには少々刺激の強い状況だった。触れ合った腕と足から伝わってくるポタの体温に、否応なしに胸の鼓動が高鳴り体温も上がる。

まるまると肉のついた手のひらをちらりと見やり、その手を取ることでできればと考えていると、こんな状況でも股間に血液が流れ込むのを感じた。

慌ててカバンを両腕に抱えるようにしてそこを隠しながら目をつぶる。

しかし一度火がついてしまうと、体の疲れに反して頭はフル稼働して隣に座る相手のことを考えてしまう。

恋人として一緒に電車旅行なんてできたら素敵だろうとか、自分

の寝顔に口づけ仕様としてポタが顔を近づけていたらなど、もしも
の話を手勝手に想像して目が冴えていく。

結局ポタの好意の甲斐もなく、移動時間は一睡もできぬままに過ぎていった。

「ゆー君、そろそろ着くよ。起きて」

「あ、うん……。ありがとう」

寝た振りとも気づかず起こしてくれるポタにお礼を言いながらも、騙したようでなんだか気が重かった。

わざとらしくあくびして見せながら下車し、ホームから改札へと歩いてゆく。

駅の出入口を抜けて外へと出たところで、不意に横から声をかけられた。

「ちよっとー、慕野遅刻したんだってー？」

からかうような女性の声に振り向くと、相手はポタのクラスメイ
トである瀬谷心美であった。三角形の耳を凜々しくピンと立てた、
犬獣人の女子である。

ポタのクラスメイトの卓球部員で、部活前にポタを迎えに行く
きによく出くわし、そのうち絡まれるようになった相手だった。

「うっさい。女子は先に出発してたぞ早く行けよ」

「先輩が言ってたよ。夜遅くまで変なサイト見て寝坊してたって」

「あの先輩全部下ネタにもってかって、お前も知ってたんだろー？」

心底うるさそうに顔をしかめながら、しっしっ、と手で払うよう
なジェスチャーをしてみせるが、瀬谷は楽しげに笑うばかりだ。

「次の試合の日はモーニングコールでもしてあげよっか？」

「いいから先行っちゃえー！」

「はいはい」

瀬谷はクスクスと笑いながら肩をすくめると、先に行った女子の

集団に追いつこうと走り出す。

隣を歩くボタがその背を目で追いながらしみじみと言った。

「瀬谷さんって、いつつもゆるー君に絡んでくるよね。仲良しなんだね」

「いやもう、ホント面倒でさー」

感心したように話すボタに向かって、面倒くさそうな表情で肩をすくめてそう返す。

二人の視線の先では、女子集団に追いついた瀬谷がほかの女子部員たちと笑いながら話しているのが見えた。

その集団が大きな交差点を曲がり、地区大会の会場である市民体育館へと向かってゆく。

後を追うように同じ交差点を曲がると、やや古びた体育館の外観が見えてきた。駐車場を突っ切るように近道をしながら建物を目指す。

近づいてみればやはり、結構古びていてなんだか寒々しい印象を受けてしまう建物であった。

なんかカビ臭いような気さえしてくるなと思いつつ入口をくぐり、とりあえずは荷物を置くため応援席へと向かう。

「うっわー、手すりとか錆びてまっくろじゃん」

「去年よかだいぶグレード下がったよなー」

少し先を歩く先輩たちの会話が聞こえてくる。そういえば去年の地区大会の会場になっていた県立の方の体育館は、新しく建てられたばかりでかなり綺麗な上、冷暖房完備で真新しい冷水機も置いてあっていいことづくめだったと別の先輩が話していた。

こんな締め切った空間で汗水たらして運動して、さぞかし蒸し暑くなるのだろう。そう思うと今から憂鬱だった。

ボタと去年使われたという県立体育館について語り合いながら自校のスペースへと向かい、座席にカバンを置きつつ時間を確認する。

もうしばらくしたら開会式が始まる時間だ。カバンを置いたままにして、ボタと連れ立って体育館のホールへと向かった。

ホールでは他校の生徒も合わせて、大勢が既に整列を始めていた。自分たちの学校の列へと向かい、その中に加わる。

ボタやほかの同学年の部員たちと雑談しながら開会式が始まるのを待っていると、そのうちスピーカーからのアナウンスが入って開会を告げる。

正直なところ、蒸し暑い中応援を続けるよりもこの開会式が憂鬱であった。

寝不足と体に残った疲れに加えて、聞く気もないのに冗長に続く開会の言葉など、これ以上ないほどに眠気を誘う。

幾度となく意識が飛ぶのを感じながら、どこかの偉い人だとか、選手代表だとか、県の職員の人だとかの言葉を聞き流しているうちに、意識が消失する空白の瞬間とタイミングを合わせるように喉の奥から声が漏れる。

「ぶっ……」

自分でも驚いて咄嗟に背筋をピンと立てるのだが。その反応が余計に滑稽さを煽ったのか、付近からクスクスと笑いを押し殺す声が聞こえた。

そりゃ自分の近くにいた奴が立ったままいびきをかいたら笑ってしまうのも分かるがと、慕野は拗ねるようにつむきながらカーッと顔が熱くなるのを感じた。

そのおかげか眠気はだいぶ吹き飛び、多少はうとうととしつつも再度いびきをかいてしまうようなことはなく開会式は終了するが、自分たちのスペースへと去ってゆく他校の生徒がまた笑っているよな気がして、どうにも落ち着かない。

逃げ帰るように自校の生徒たちの輪の中に潜り込むと、ちょうど

顧問教師が選手たちに呼びかけているところだった。

「じゃ、このあと試合だからみんな六番コートに集合な。特にレギュラーの奴らは先に行っとけ」

レギュラーに選ばれた先輩たちが、朝っぱらからなぜそんなに元気なんだと思える程の勢いで、大きく返事をする。

その返事に満足げに頷いたあと、教師はふと慕野の方を見やり、
「それから慕野は、寝てないでしっかりしてろよ？」

「は、はい！」

不意に自分へと話を向けられて反射的に返事をしながら、内心で深くため息を吐く。昨日ちゃんと眠れていたらと思わずにはいられないが、それも今更であった。

とにかくこれ以上何も失態を見せないようにしなければ。それだけを考えながらコートへ向かう部員たちのあとに続いた。

先にシングルの試合の準備が始まっており、自校の選手である五十嵐先輩とその対戦相手が卓球台を挟んで位置についている。

今朝から稼いだ汚名を返上するためにも応援に精を出す必要があった。

審判のホイッスルの音とともに試合が始まると、相手校の応援に負けないよう、腹の底から声を張り上げて応援する。

先輩の点が入る都度、相手から点を入れられる都度、お決まりの言葉であるが魂を込めるつもりで叫ぶ。

その甲斐あってかはしらないが、先輩は何度か危うい場面もあったものの、ゲームを連続で取得していき気づけばストレート勝ちとなっていた。

ほかのコートではまだ試合が続いているようだし、自分たちの試合はだいぶ早く終わったようだった。

無事勝利した先輩が得意げな顔で戻ってきて、部員たちとハイタッチを決める。

「うしー！じゃあ次の試合まではしばらく休憩だな。各自ちゃんと休んで備えてろよ」

和気あいあいとしたムードを顧問教師がそう締め、部員たちは雑談しながら上の階の応援席へと戻ってゆく。

自分もそれに続こうと歩き出した慕野であったが、背後からポンと肩を叩かれて呼び止められた。振り返って見上げると、顧問教師が立っている。

「慕野、元気があっていい応援だったぞ。次もあんな感じで頼む」

「あ、はい！ありがとうございます」

昨日の夜から不連続きではあったが、こう褒められると気分がいい。笑顔で返事をする、顧問は少し申し訳なさそうな顔をしながら続ける。

「あー、それとな。各校一名ずつ審判やらせなきゃならねーんだけど、このあとのウチからの審判、お前やってくれるかな？」

「え、あ、はい……。大丈夫です」

右手で頭を掻きながら、少し遠慮した口ぶりですう話す顧問へ、少しテンションの下がった声で返事をする。

顧問はこれも一年の仕事だからと、言い聞かせるように続けて話したあと、審判を行うコートの番号を告げてドタドタと足音を立てて去っていった。

これで断って同じ学年のボタに審判の役目を押し付けてしまうくらいなら、自分がやってしまおう思うのだが、応援と違ってしっかりと頭も使わなければならないのがつらい。

ミスをせずにすむだろうかと不安に思いながらも、しばしの休憩を挟んでから指定されたコートを目指して歩き出す。朝食もまだで

あつたし早めの昼食にしたいところだったが、それは試合が終わるまでの我慢になりそうだった。

審判といっても野球やサッカーと違って一体一の競技なので、原則やセーフやアウトなどの複雑な見極めなど必要なく、点が入った方のスコアボードにそれを記すだけでいいのが救いだっただ。

目的のコートへ着くと、職員の人に会釈をしながらスコアボードのそばに立ち、選手が揃うのを待つ。

「あれ……？」

コートに入場する選手たちを見つめながら、慕野は困惑の声を漏らしていた。

先ほどと同じシングルスのもりでいたのだが、コートに入ってくるのは6人。どうやら団体戦の試合が始まったらしかった。

となるとシングルス4試合の間にダブルス1試合挟んで最大5回も続く試合の間、この疲労感と眠気に抗い続けなければならないのかと思うと気分が沈んでしまう。

ホイッスルの音とともに始まる試合を、早く終われと念じ続けながら見守った。

しかし願いに反して両チームの実力は拮抗しており、どちらもストリート勝ちさせるような真似はせず、また一人負けてしまえば次の選手が全力で巻き返しを図る。

応援する立場からすれば熱中する試合なのであるが、熱気と湿度の増していく体育館の中で立ち続け、眠気と疲労感も合わさって頭がふらふらしてくるほどだ。

そんな中で続ける審判の業務で、大事には至らないまでも多少のミスは発生してしまう。

平謝りをしながら審判を続け、ほとんど倒れそうになりながら試合目を終えたあとには開始から1時間半もの時間が経っていた。

さわやかな汗を流しながらお互いの健闘を讃え合う両チームのスポーツマンシップも、疲れきってしよぼしよぼする瞳からではとても輝いては見えない。

ふらふらとおぼつかない足取りで、自校のチームが試合中のコートへと向かい、ベンチの空いている場所にドッと腰を下ろした。

疲れから来る大きなため息をこぼしていると、労わるような声が背後から聞こえてくる。

「あ、ゆー君おかえり。長かったねー」

「ただいま。ほんと、カットマン多いし2対2で最終戦に進むしで疲れたよ」

「あはは、おつかれさまー」

「ん、ありがとう」

そうやってボタから笑顔でお疲れ様と言ってもらえるだけで、きつい審判の仕事を引き受けて良かったと思ってしまう。

少し横にずれてベンチにボタの座る隙間を作りながら、労いの笑顔に笑い返す。

隣同士に座って時折雑談を交えたり、点数の獲得に合わせて応援の声を張り上げながら、自校の選手たちの試合を眺めた。

既に終盤まで差し掛かっていた試合はすぐに終わり、時刻は昼を回る。

今にも腹が鳴り出しそうだった。朝から何も食べていない。空腹で目が回る思いだった。

ボタの笑顔と労いの言葉は英気を養ってくれたが、やはり心だけでなく体にもエネルギーの補給が必要だ。

おにぎりやサンドイッチに思いを馳せながら、座席へと向かうがそこにはあるはずのものがなかった。

「えっ」

呆然と、カバンを置いてあったはずの座席を眺める。シヨックから立ち直って周囲をキョロキョロと見回したり、座席の下を確認してみたりするのだが、見当たらない。

他の部員たちはそれぞれ持ってきた弁当を食べ始めたり、体育館内の売店へ向かうなり外のコンビニへ買い出しに向かうなどしているが、慕野はただその場で立ち尽くしていた。

携帯は時計替わりにも使うためポケットに入れていたが、財布はカバンの中だったから外にご飯を買いに行くこともできない。当然弁当もカバンと一緒に行方不明。

この世の終わりをしているかのように青ざめた顔で、慕野は静かにうつぶんでいた。

どさっとベンチに腰を落としながら頭を抱え、考え込む。

このベンチに置いた記憶はしっかりとあるから、電車に忘れたということはない。なら盗まれたのだろうかと考えると、部員全員この場から目を離していたから、その可能性は十分に考えられる。

ドツと疲れが増して来るのを感じながら、どうにかカバンを見つけ出す方法を思案する。

ベンチで弁当を食べている部員たちに声をかければカバン探しを手伝ってもらえるかとは思ったが、今朝から失態続きである手前、これ以上迷惑をかけてしまうのも憚られる。

その場でうつぶきながら考え込むこと十数分、周りからも怪訝な目で見られた頃、事務室の存在を思い出して勢いよく立ち上がった。

落とし物としてカバンが届いているかもしれない。よしんば財布が抜かれていたとしても、今大事なのは弁当の方だ。

そう考えつくとも立ってもいられず、彼は事務室へと向けて小走りで向かい始めていた。

通路をたむろする他校の生徒たちをかき分けるように進んで、事務室へとたどり着いた。

表札の貼られたドアを軽くノックしてから入室し、デスクでお弁当を食べながらテレビを見ている、初老の犬獣人の事務員に話しかける。

「あ、あのー、落し物でカバン届いていませんか？」

事務員は面倒くさそうにしながら立ち上がると、聞き返してきた。

「うーん、カバンは今日は届いてないね。何が入ってたの？」

「替えのジャージと財布と、あとコンビニで買ったお昼の飯が」

「あー、それだと多分盗まれちゃってるね。大会の日とか結構置き引き発生するみたいだから、貴重品はもって歩かないとダメだよ」

慰めの言葉すらなく机に戻って昼食を再開する事務員の態度に、二重に打ちひしがれたような気分になりつつ事務室をあとにする。

ベンチに戻ろうにも脚が重たく感じられて、うつぶきながらのろと歩いた。

自分でもどれだけの時間をかけて戻ったかわからないが、ベンチに戻ると既に部員たちの姿はなく、顧問が席に座って眼鏡を拭いていた。

眼鏡拭きをポケットにしまい、眼鏡をかけ直しくリアになった視界で慕野を見つけると、少し怒ったように鼻息を荒くしながら駆け寄ってくる。

「おい、慕野！何やってんだ次の試合始まるぞ。早く来い！」

「あ、すみません……」

どうやら部員たちを先に行かせて待っていてくれたようだが、疲れと気分の落ち込みが重なって、力なく謝罪することしかできなかった。

そのただ事ではない落ち込みように彼の方も何かを察したのか、

「一転表情を柔和にしながら心配するような声色で話しかけてくる。

「なんだか顔色が悪いぞ。どうした？具合でも悪くなったか？」

「はい……、少し……」

「あー、そうか。なら午後は応援はいいから、席で休んどけ。これに懲りたら次からはちゃんと早寝して翌日に備えろよ。わかったか？」

「はい……、すみません……」

尋常ではない落ち込みようを慰めるように、ゴツゴツとした大きな手で慕野の背をぼんぼんと軽く叩いたあと、顧問は劳いの言葉をかけて部員たちの元へと向かった。

その背中を見送る余力もなく、慕野はそのままベンチに座り込んでうつむく。

踏んだり蹴ったりとはまさにこのことだと今朝も思ったが、あの瞬間はまだどん底ではなかったようだ。幸せが一気に逃げていきそうなのほどの大きなため息を吐き、目の端に溜まった涙を拭いた。

もう何かを考えるような気力もなく、倦怠感に身を任せてボーっとしていると、やがてがやがやと部員たちの話す声と靴音が聞こえ出す。

ゆっくり顔を上げると、試合に勝ったらしく笑顔の部員たちがこちらへとあるいてくるところだった。

寝不足のことや、今朝も言われた下ネタも絡めてからかってくる先輩、体調を気遣ってくれる先輩、落ち込む慕野への反応はそれぞれだったが、疲れきった彼にはそのどれにも生返事ではか答えることができなかった。

現地解散を予定していたため、部員たちは荷物を持つと思いいのタイミングで体育館をあとにする。

そういえば帰りの電車賃はどうしようかと、ぼんやりと考えていると、目の前に誰かが歩み寄ってきた。

「ゆー君大丈夫？午後からずっと元気ないみたいだけど」
見上げると、ボタが心配そうな表情を浮かべながらそう訪ねてくる。

「なんとか笑顔を作りながら返事をしていると、周りに誰もいなくなっていることに気づいた。

「もうみんな先に行っちゃったよ。立てないぐらい体調悪いようなら先生呼んでくるけど……」

「あ、だ、大丈夫だよ。なんか疲れちゃって」

空気でそう返しながら重い体をなんとか立ち上がらせる。ボタの隣をよたよたと歩きながら一緒に出口へと向かった。

体育館から出て、傾いた日差しに照らされながら駅を目指す。

駅の入口が近づいて来たところ、慕野は恥ずかしそうにぼそりと言った。

「ぼ、ボタ君……、あのさ……」

「うん？」

「明日返すから、帰りの運賃貸してもらえない……かな？」

不安げにそう言いながらボタの顔を見ると、彼はきよとんしながら考え込むような素振りを見せていた。

「それは全然いいけど、あれ？確か今日カバンも財布も持ってきてたよね？」

手ぶらで歩く慕野の姿を不思議そうに見つめながらボタが訪ねる。慕野は恥ずかしそうに頬を掻きながら応えた。

「あの、一回戦のあとに席に戻ったら失くなってさ、事務室いったけど届いてなくて……」

「ええー、そうだったの？もしかしてそれでゆー君が午後いなかったのかな」

「うん……。財布と弁当入れてたから、ないと正直きつかったし」

「あれ、じゃあもしかしてお昼まだ？」

「うん……」

「それでそんなに具合悪そうにしてたんだ」

ボタは納得したように頷きながら、自分のカバンの中に手を突っ込んだ。どうしたのだろうかと慕野がぼんやり見ていると、おにぎりを二つ取り出す。

「じゃあこれ余ったやつでよければだけど、いる？」

慕野は目を見開いて、二つのおにぎりを食い入るように見つめたあと、再びボタの優しい顔へと視線を向ける。

「えっ、いいの？」

「うん。僕、梅苦手なのに間違えて買ったんだ。お昼抜きじゃつらいと思うし、あげるよ」

「あ、ありがとう……」

感動のあまり涙がこぼれそうな気分になりながら、二つの梅おにぎりを受け取った。

駅前のベンチに座って、再びボタにお礼を言ったあと、頂きますと手を合わせてからおにぎりを頬張る。

「くう……」

美味しかった。今日一日辛い思いをしてお腹を空かした後だからという以上に、想い人であるボタからもらったおにぎりだと思うと、この空腹の中でも食べてしまうのがもったいないと感じるぐらいだ。

「そんな風に美味しそうに食べてもらうとなんだか嬉しいなー。あ、これお茶買ってきたよ」

「あ、お茶までありがとう。明日絶対返すから」

「いいよー、お茶くらい。それよりゆっくり食べないと喉に詰まっちゃうよ」

そう言ってボタは穏やかに笑った。傾いたオレンジ色の日差しの

中で、その笑顔がとても魅力的で、思わず胸が高鳴る。

おにぎりの味が、喉を潤すお茶が、そして何よりボタの笑顔が滲いた心に染み渡る。

今度は嬉しさに目頭が熱くなってくる。それをこらえている表情が、梅干の酸っぱさを耐えているように見えたらしく、ボタが「あはは」と楽しげに笑った。

そんな笑顔を自分に向けてくれることが嬉しくてたまらなくて、慕野はぼそりとつぶやく。

「ありがとう……」

そして心の中で、『好きだよ』と付け足した。まだ直接伝える勇氣はなかったが、少なくとも今この瞬間は彼の笑顔と優しさに触れるだけで、幸せでたまらなかった。

季節は
秋になり

想い人と
部活仲間という
関係に妥協
しながらも

同じ時間を
過ごせる日々は
充実を感じていた

あっ
慕野じゃん

ボタちゃん
なら

部活仲間
せや ここみ
瀬谷 心美

たぶん…
帰っちゃったよ

え？

6限が
終わったあと…

あっ

脳内彼女の
返事でも書いて
んのか？

壁紙がデブの
おっさんて

ぶっ

趣味悪すぎる
だろ！

えっポタちゃん
ガチホモ？

つか
このキメエ
おっさん誰だよ

あれポタちゃん
怒っちゃった？

まあ怒ん
なってる

ちよっ
…おい

それでそのまま
帰っちゃった
みたい…

あ



何分前ッ!?



うん…

10分くらい前
だよな?

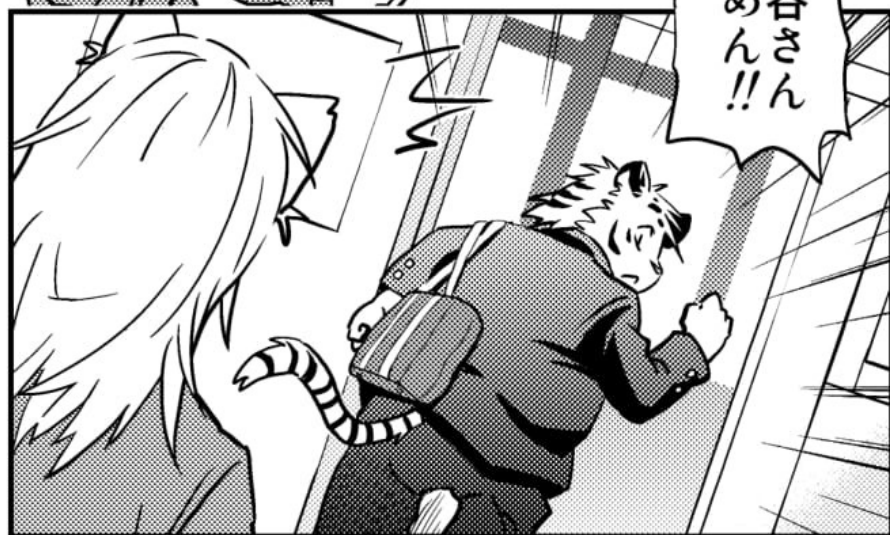
…え

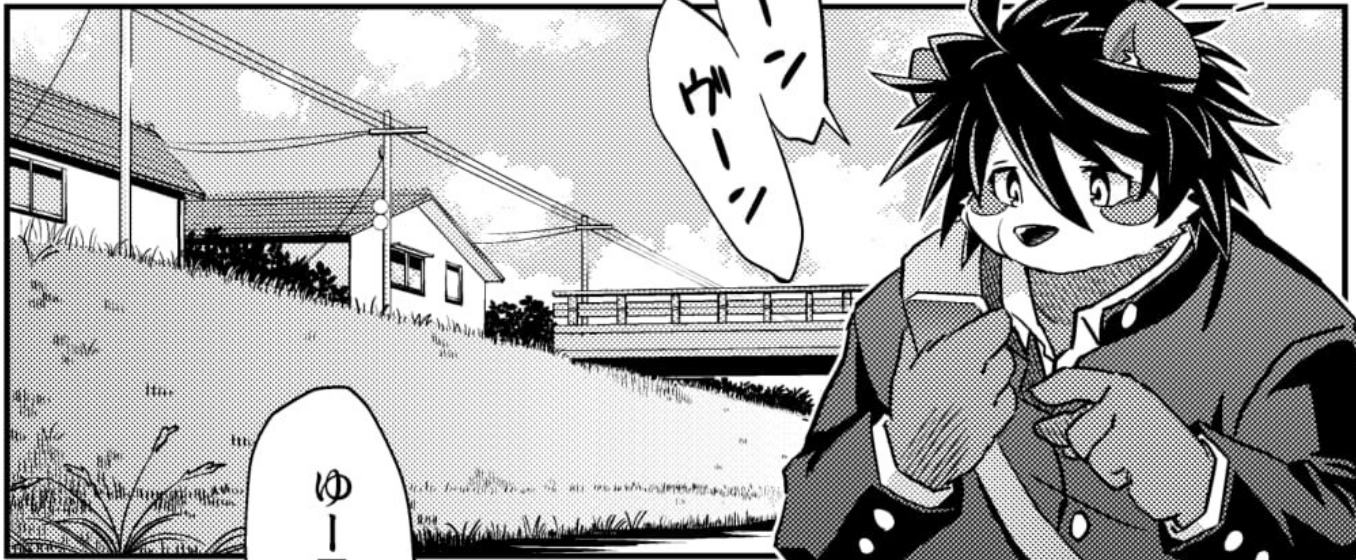
瀬谷さん
ごめん!!



えっ?
ちよっとお

今日オレと
ボタ部活
休みで!!





ハッ
ハッ

ゆー君？



あつ…ボタ君
電車乗っちゃ
った!?

はっ

えっ…
まだ橋渡った
ところ…

はっ

はっ

あ…あのさ…
オレン家で
ちよつと話聞かせて
くれない？



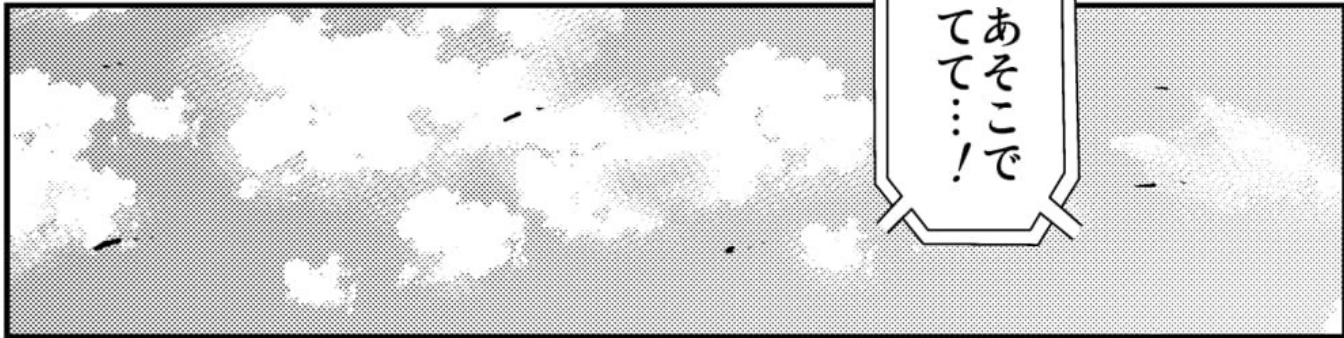
…うん

…何かあった
みたいだし
良かったら
その…

このすぐ近く
だからさ



じゃあそこで
待ってて…!



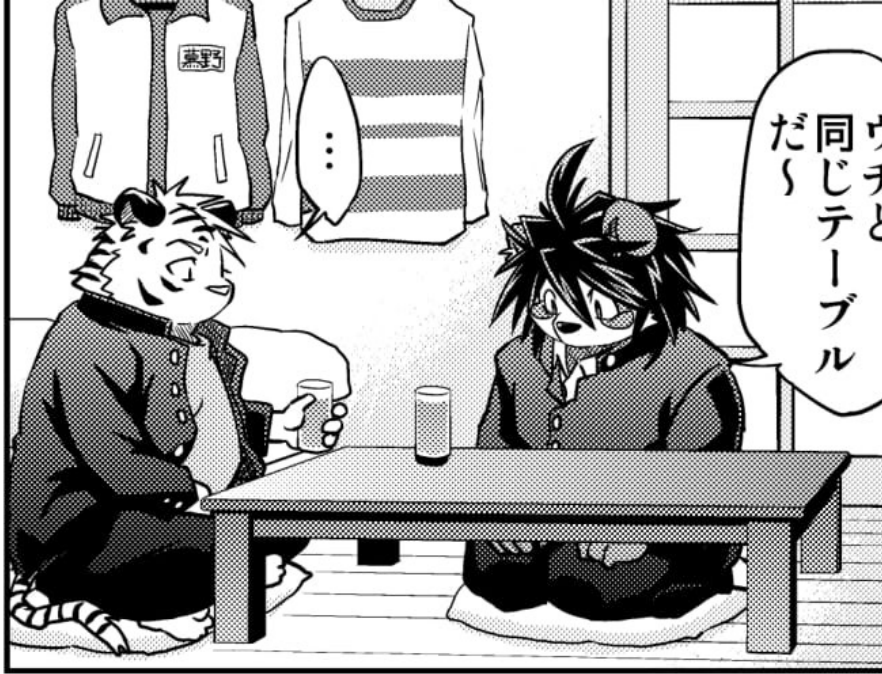
あつうちと
同じ鍋が
ある

一人暮らし
いいね

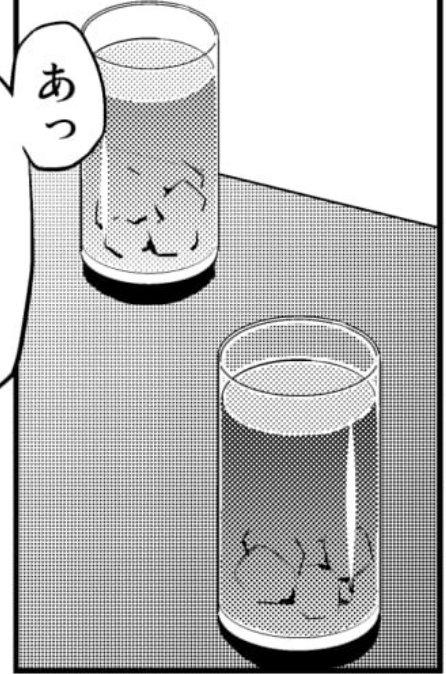
…



お邪魔し
ます



あつ
ウチと
同じテーブル
だ



なんか
恥ずかしいから
やめて？

あつウチと
同じコップ



男の人が
好きだったり
するの？

その…
もしかして
なんだけどき



…ところで
ボタ君って





ほら…女子の
瀬谷さんから
放課後のこと聞いて
酷いなりって!!

バカ…ツいきなり
何聞いてんだよ
オレは…ツ!!!

あ…ごめん!!



ううん…

…んなワケ
ないよね
アイツ等
ウザ過ぎ…



クソ…ツ
家に呼んでまで
何がしたい
んだよオレは
そりやあ
ボタ君がもし
そうだったら…
そうだったら…



ゆー君が
言っただけ
合ってるよ



え…





みんなに見られ
ちゃった画像…

これが



えっこの人
どーいう
人なの？



ゆー君だから
教えるけど
他の人には
内緒だよ！

…え？



あの…えーと
一ヶ月くらい
前にね

ネット通じて
知り合った
んだけどね



年は少し
離れてるけど
全然そんな感じ
なくて…



えと…その…
大事な人？

…ボクは
コーテツさん
って呼んでるん
だけど…

もじ

もじ

もじ

もじ



駄目だよッ!!!

そんなネット
知り合うとか!!

おい...何言ってるんだよオレ!?



えっ

そっそんな事
ないよ?

優しく
してくれるよ?

やめるよ!!



いや表面上優しい
人なんてたくさん
いるし:

それに男同士だと
体だけが目的の
人も多いうって
聞くし:

コーテツさんは
そんな事しないよ

会ったこと
ないのに悪口は
言わないで…

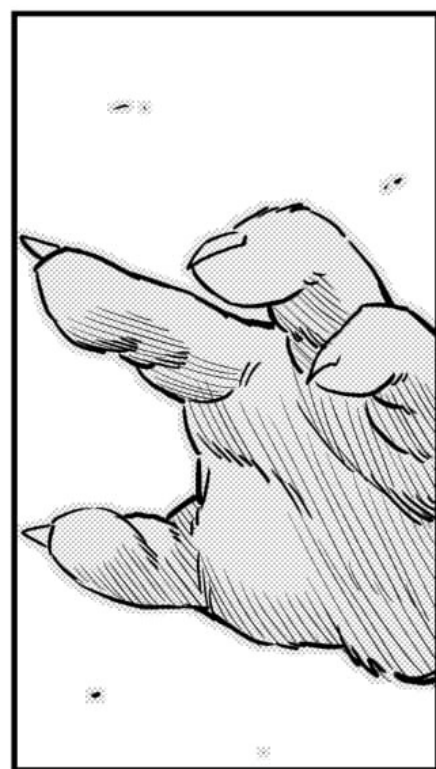
付き合う前に
約束して
くれたから…

違うんだ…

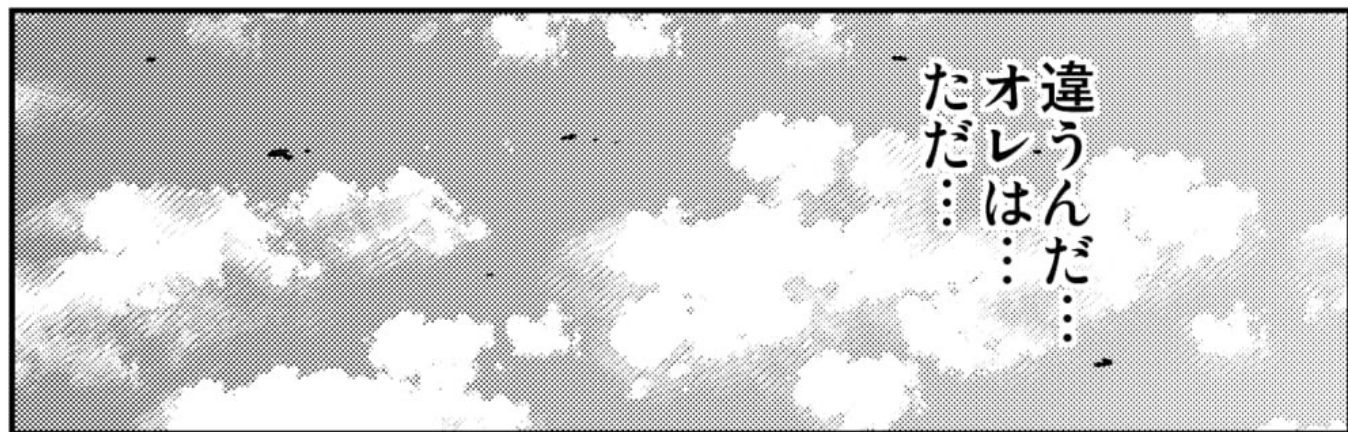
最初の半年は
そういうユト
しないって…

そういう目的
じゃないって

違うんだ…



クソッ...クソッ...クソッ...



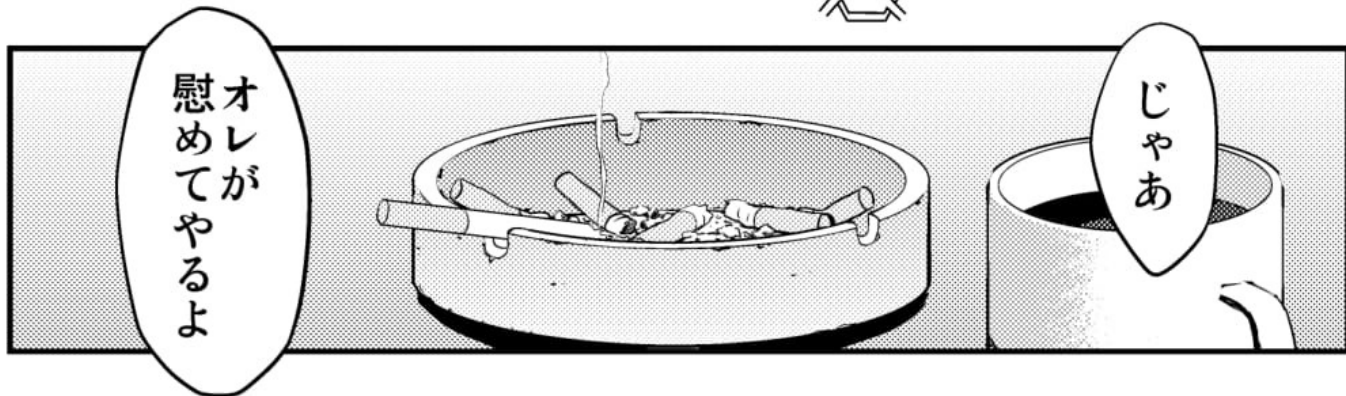
コーテツの
アパート

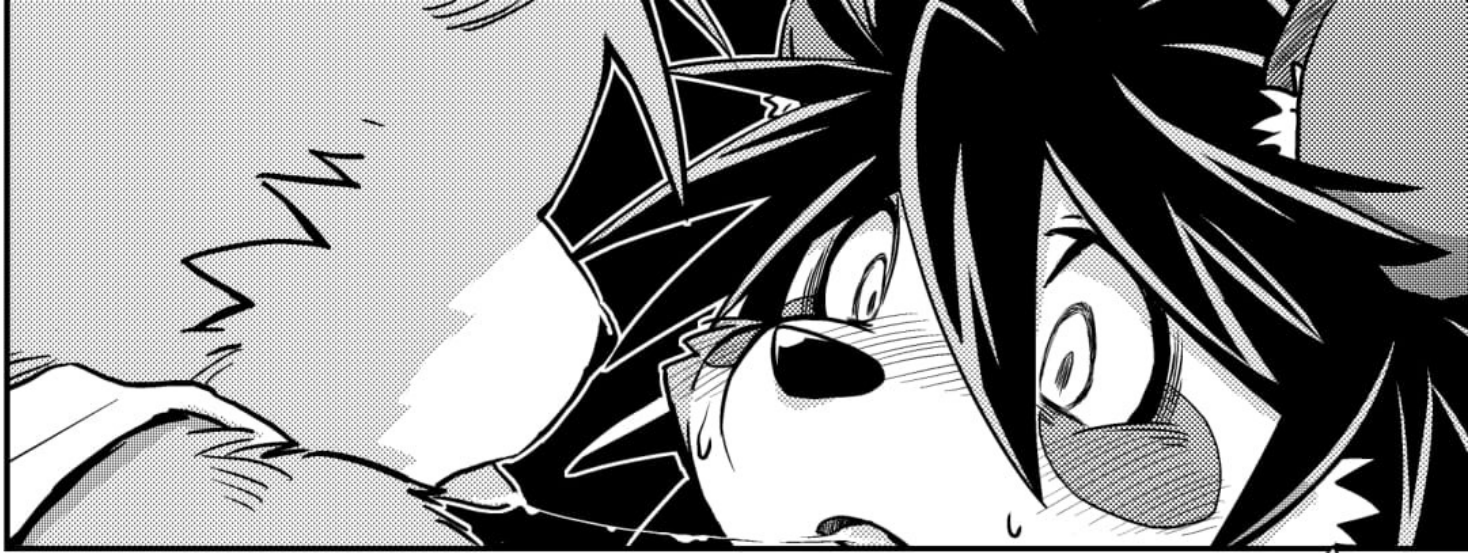
ボタ君が
こんな時間に
来てくれるなんて
嬉しいなあ

ボタの大事な人
さおとめ こうてつ
早乙女 鋼鉄

この間話した
ゆー君のこと
覚えてます？

確か同じ部活の
友達でしょ？
どうかしたの？





ぬぎ
ぬぎ

何ってちよつと
チューしただけ
だよ？



なっ
何してるん
ですか!?



一ヶ月も経つし
チューくらい
いいじゃん？

んー？

そっ…
そういう
目的じゃない
って…



ボ…
ボク今日は
帰ります…ッ！

ボタ君は
いちいち純粹で
可愛いなあ



まあ落ちて着けて

わっ

LIVE



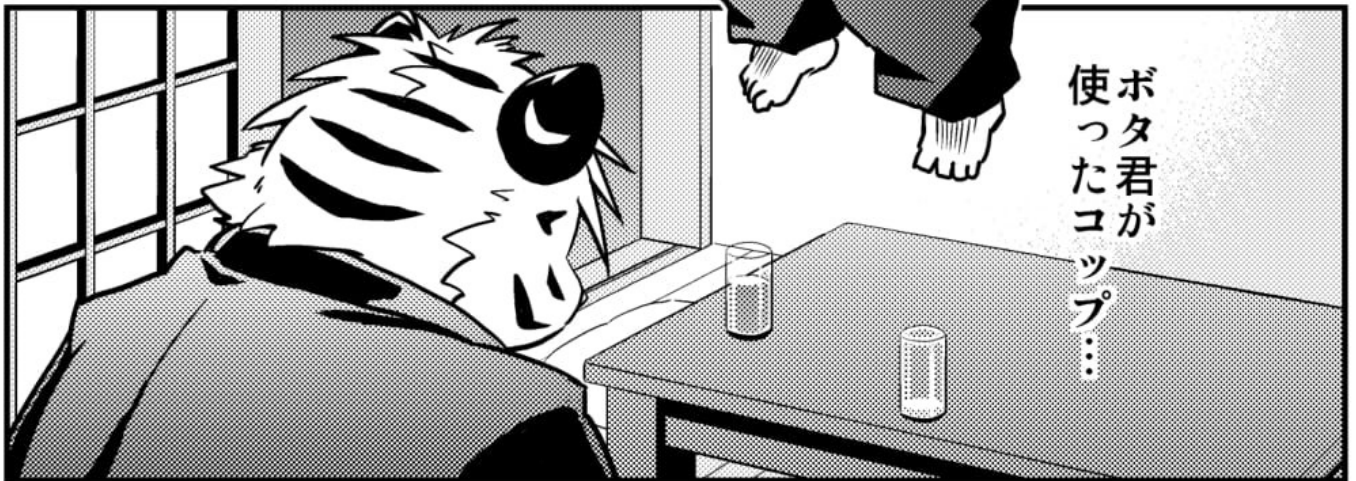
ホントは

オレに慰めて欲しいから来たんだろ?





ボタ君の
飲みかけ...



ボタ君が
使ったコップ...

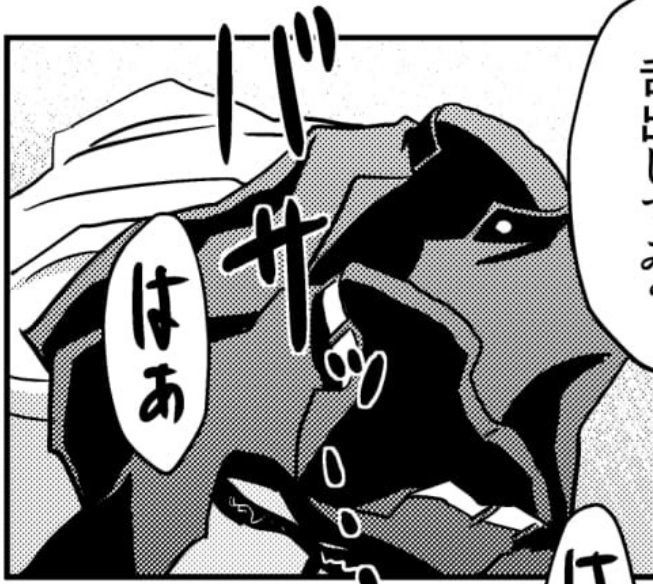


ボタ君! あの人ともうキスくらいはやっちゃってるのかな!



ボタ君と
間接キス!

とっ



はあ

ハッ
サッ
ッ

ほらもっと
舌出してみ?



はあ

はあ

はあ



ボタ君よお

はあ

何が「そういう
目的じゃない」だよ

はあ



おパント
ベトベト
じゃねーか

ッ
ッ
ッ



オイオイ
ちよっとチュ
ー
しただけで

小つせーくせに
すつげえカたく
なってるぞ？

ちゅっ
ちゅっ
ちゅっ

はあ

もうこれ以上
やめて下さ…
あっ…

はあ

ちゅっ
ちゅっ
ちゅっ

ヤベエよ
ボタ君

はあ

すつげえ

ヒロこ

あー

はあ

はあ

ボ夕君も…いつかあの人と…



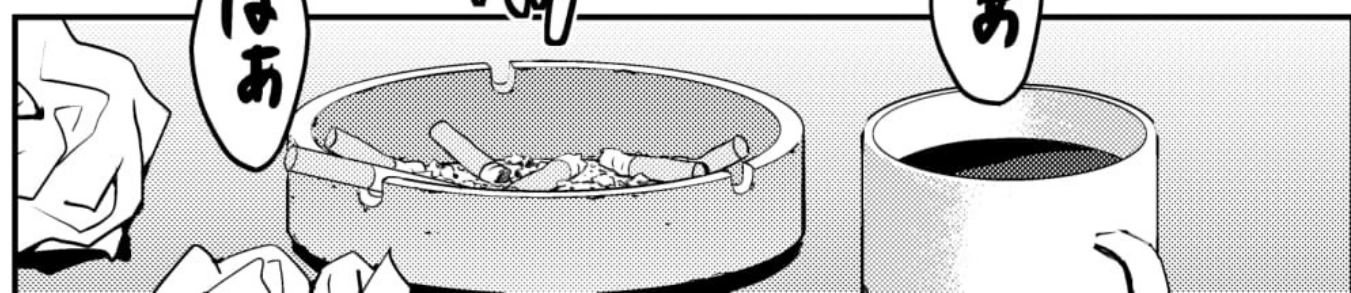
オレが…最初の人になりたかった…



オレも…オレも…ボ夕君と…







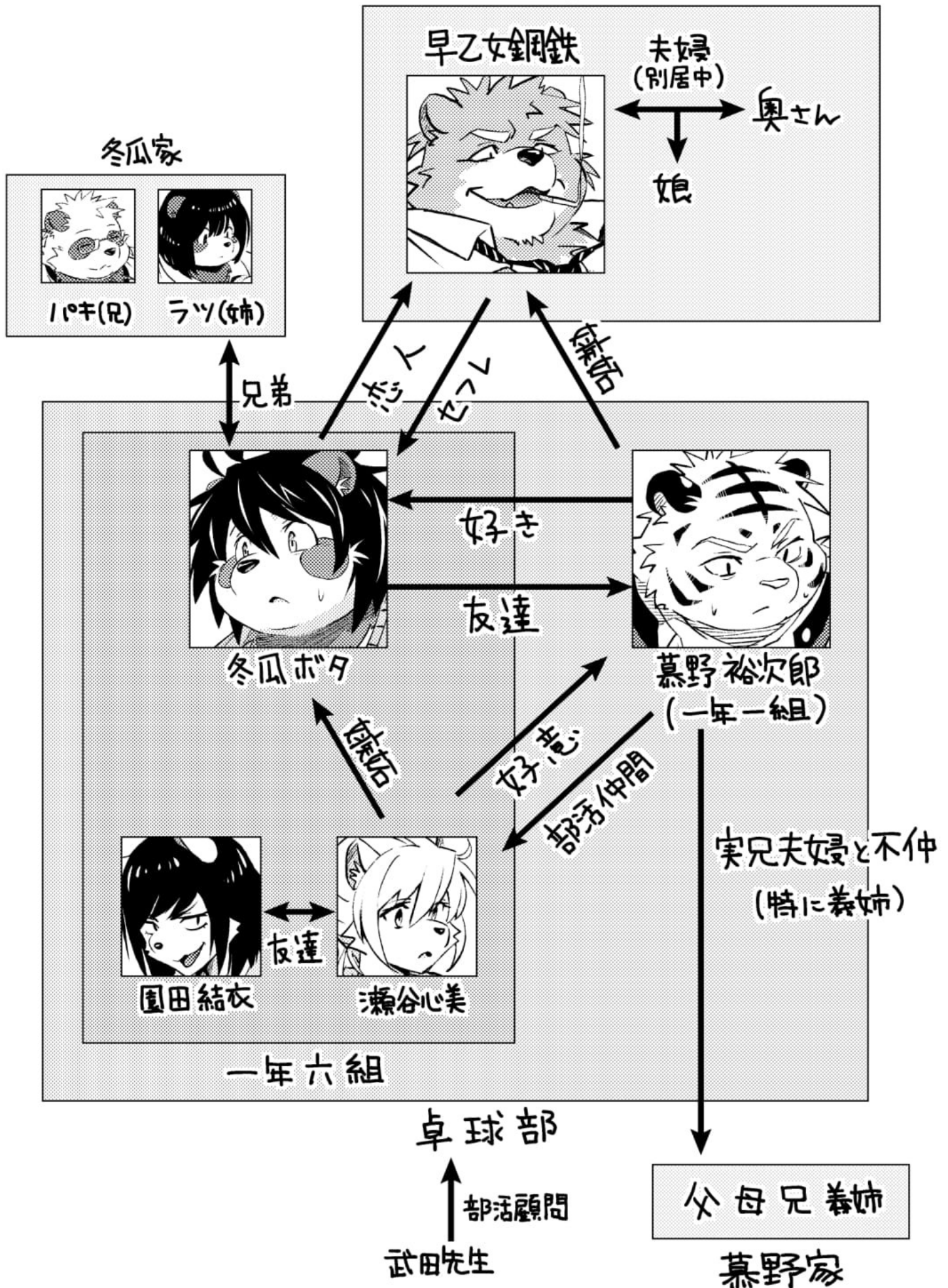


ここまでが2014年の夏コミで出した「ブルーにこんがらがって」から
ゆー君とボタの物語の再録でした～。

何回再録するの？って話ですね。多分これが最後です！！！！

それはさておきこれまでと、この後の冒頭の簡単なまとめです。

早乙女家





部活の事で
話あるん
ですけど…

…は
慕野君は？

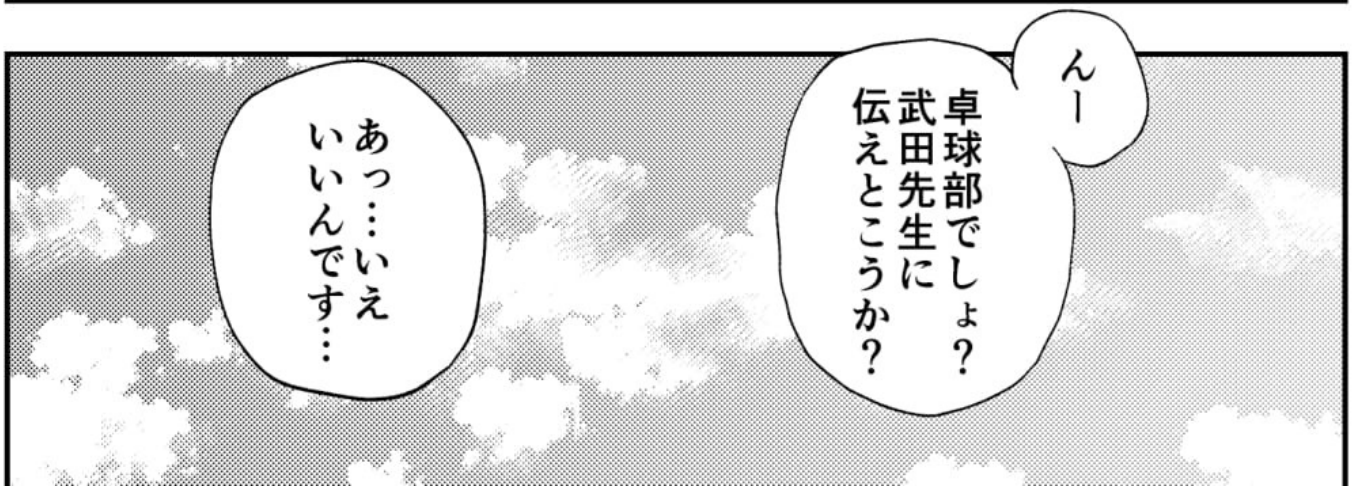


あー…
今日も
休みだよ

連絡先とか
聞いて
ないの？



…は



あっ…いえ
いいんです…

んー
卓球部でしょ？
武田先生に
伝えとこうか？



それで

ダーリン
慕野は今日も
休みだった
の？



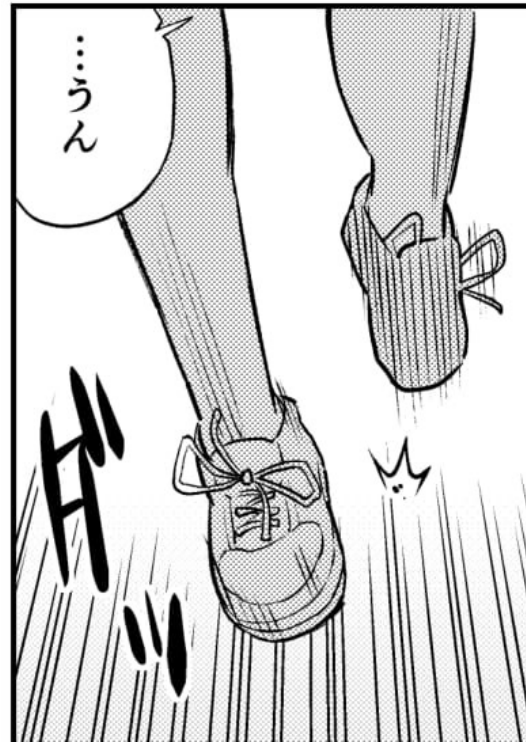
ちよっ…まだ
ダーリンじゃ
ないよっ!!
何ぞの
フリーがナシ!!

まだ
なんだね
えーっ何ヶ月
待たせるの?
連絡先すらまだ
なんでしょ!!

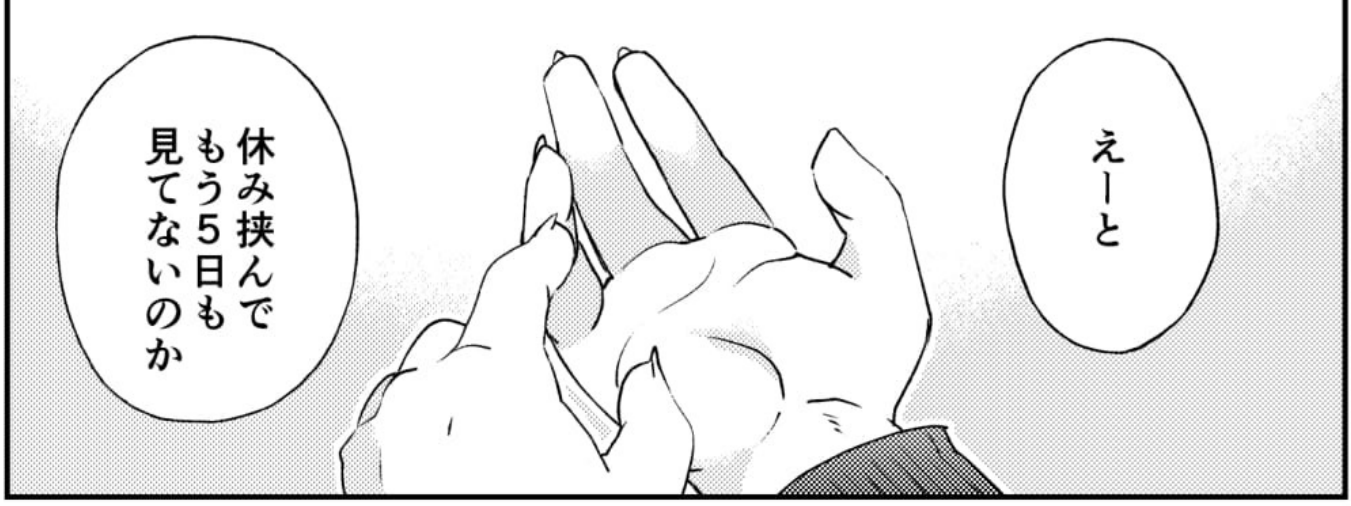


というか
慕野って
童貞っぽいし
余裕だろうに

そういえば
ボタちゃん
も
来なく
なっちゃった
よね



…うん



休み挟んでもう5日も見てないのか

えーと



ん？
二人共？

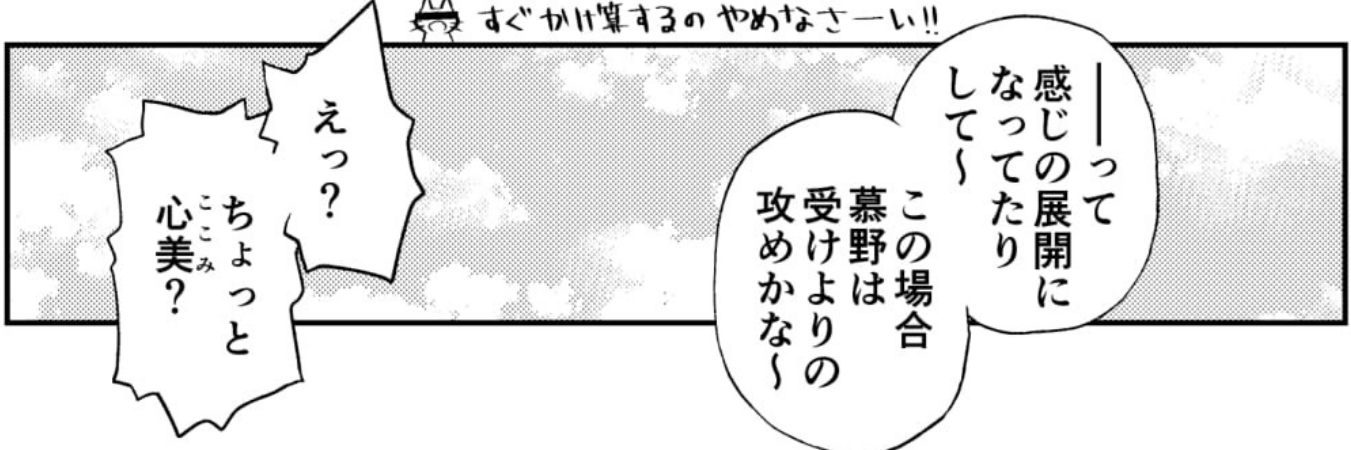


二人共
どうしてる
んだろうね



何も起きない
はずがななく…

男二人、
同じく欠席、



☆ すぐかけ算するのやめなさい!!

——って
感じの展開に
なったり
して

この場合
慕野は
受けよりの
攻めかな

えっ？
ちよつと
ここみ
心美？



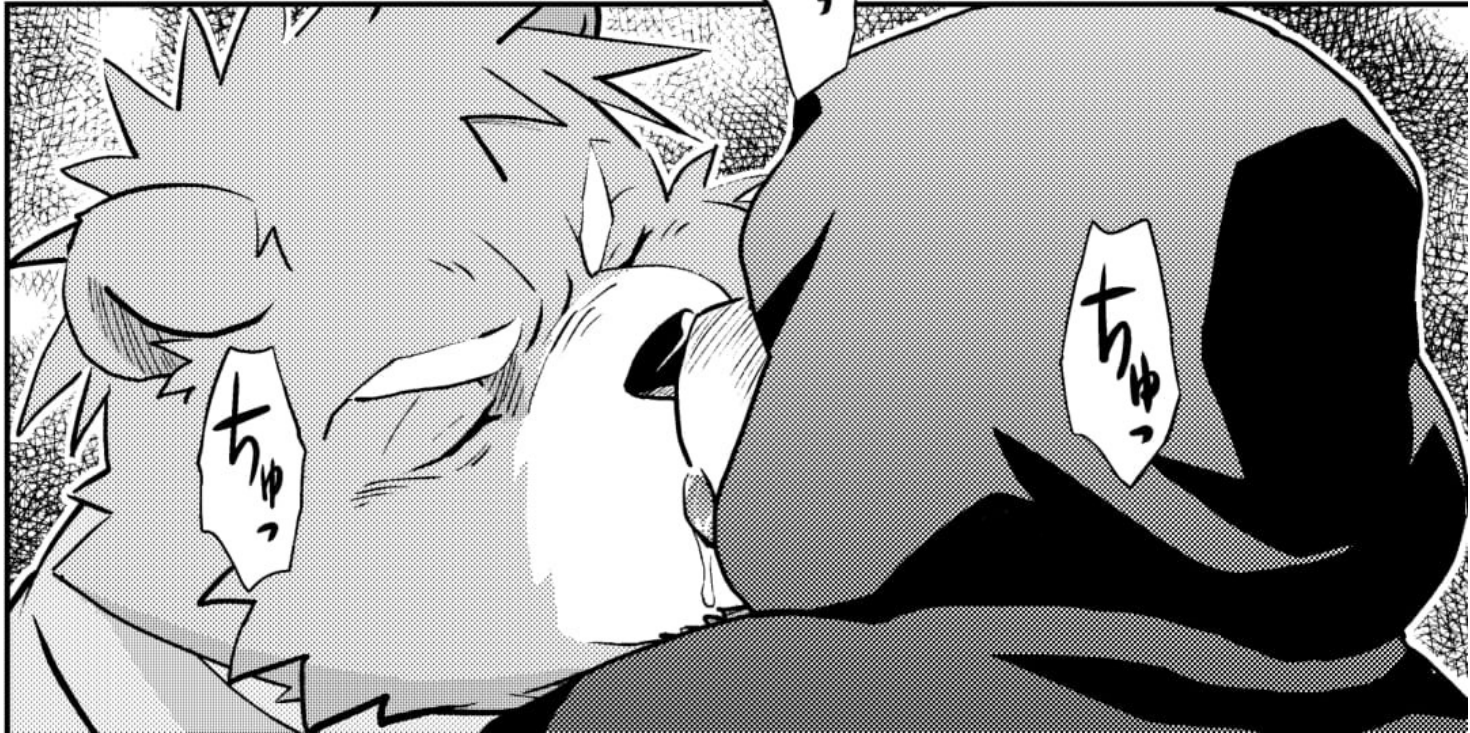
ちゅー
してもいい？



ケン君
写真で見るより
可愛いね



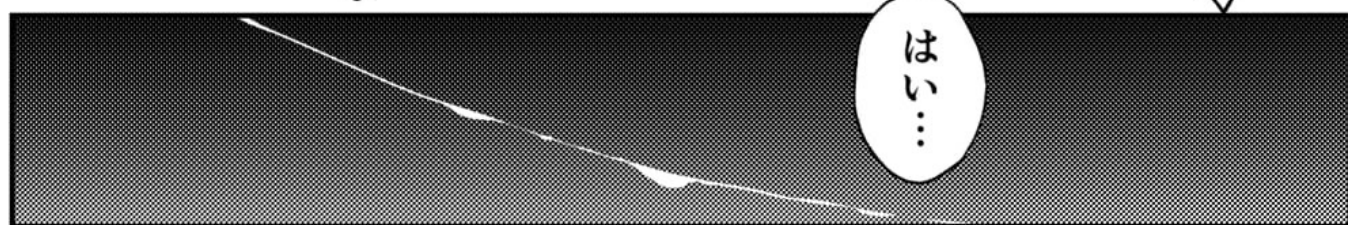
は…はい



ちゅっ

ん

ちゅっ





じやそつやま

肉余ってるよ
ボタの
じゃない？



そあ
う

ラツ姉に
あげるよ



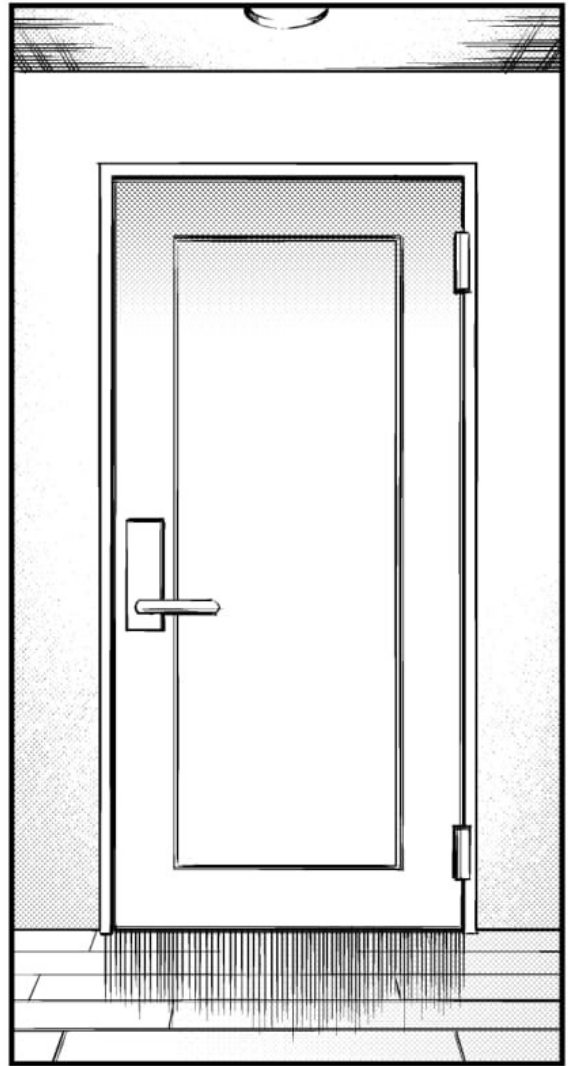
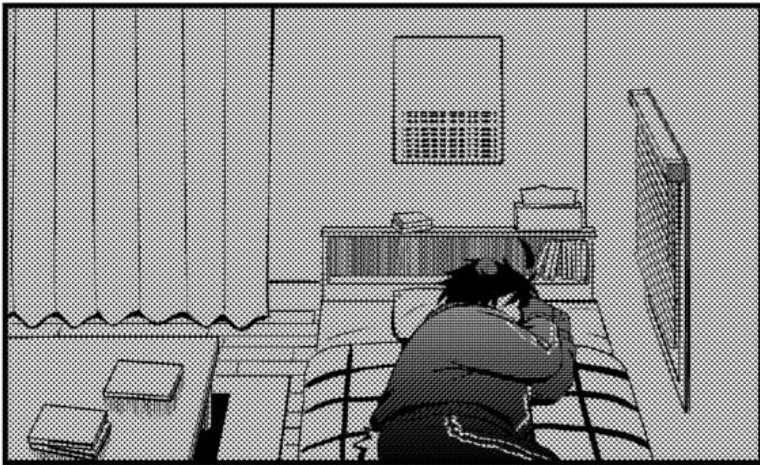
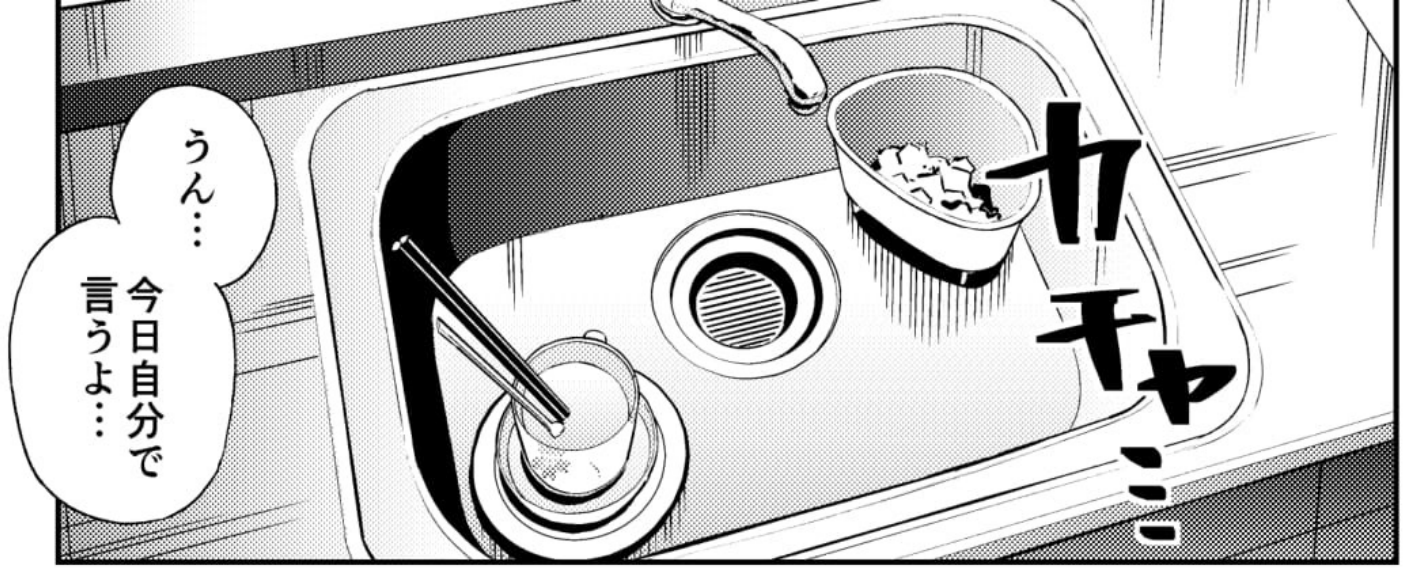
じゃあ
もーらい

ところで
ボタ



お前が
休んでること

まだ
父さんにも
母さんにも
言っていない
だぞ？



相手の
黒井君って
社会人でしょ



次の大会の
メンバー
入りたいん
だって



心美ちゃん
部活の後なのに
気合入ってる
ねえ

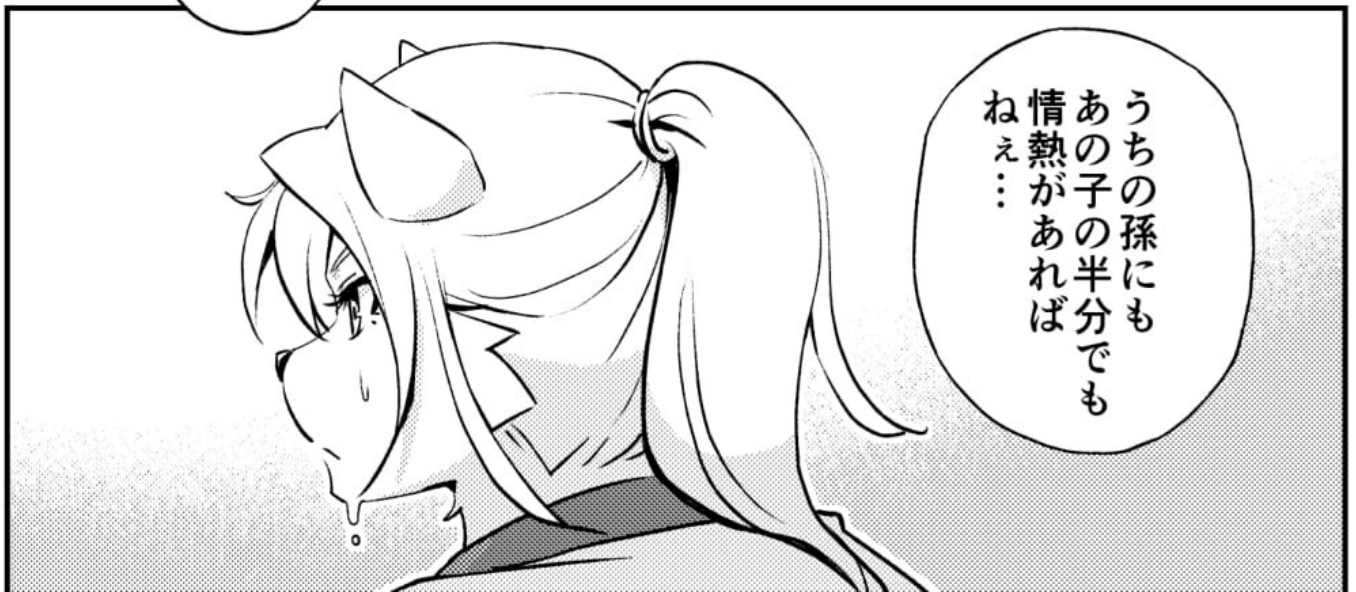


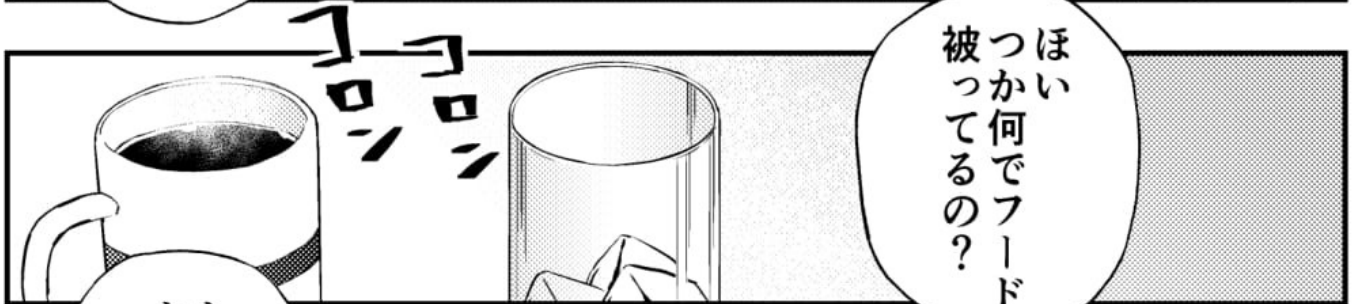
はあー：
一年生なのに
そりゃ偉いねえ



ホント
ホント

うちの孫にも
あの子の半分でも
情熱があれば
ねえ：







あまり人に見られたく
なかつた
ので...

ササッ



コト...

あーそりゃ
そうだよね



どど...
どうぞ

タバコも
吸って
いい?

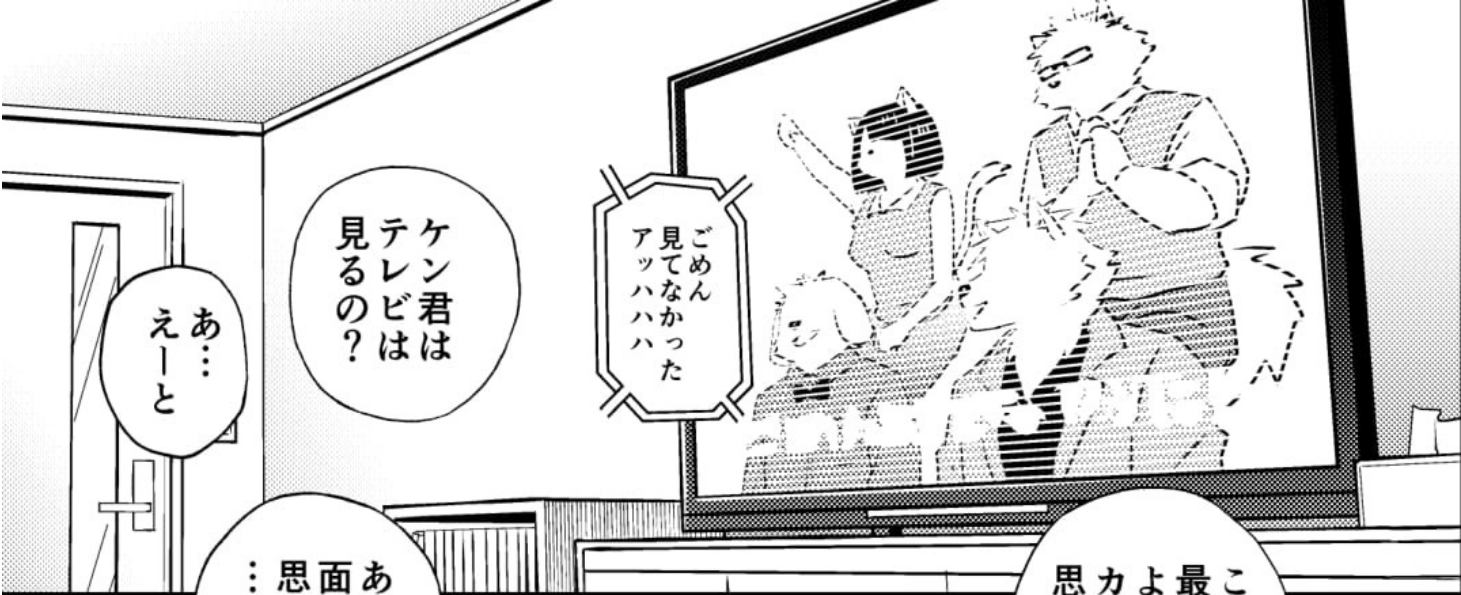


ハハ
冗談だよ



え...?

ケン君も
吸う?



ケン君は
テレビは
見るの？

あ…
えーと

あ…
面白いとは
思いますけど

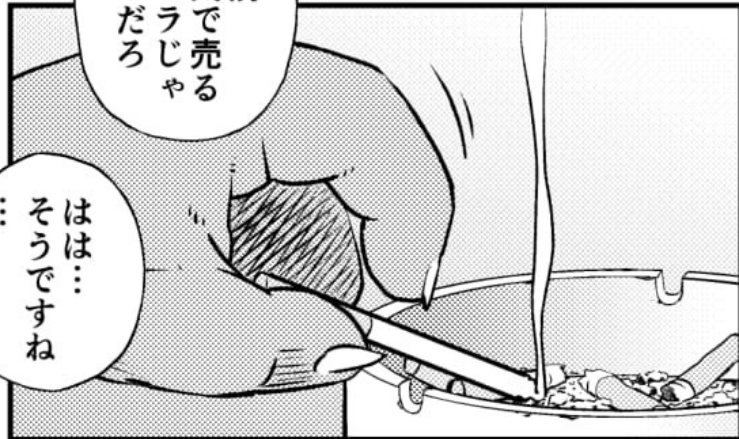
この女の子
最近
よく見るけど
カワイイと
思う？

この子最近
絶対おっぱい
いじったよな



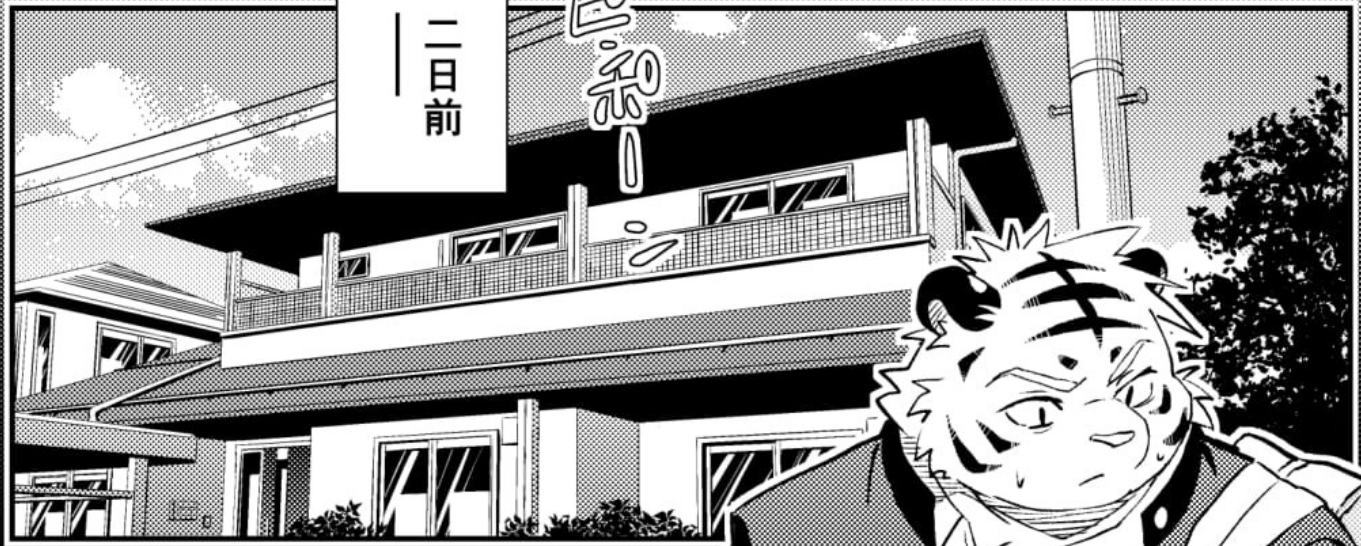
お前
色気で売る
キャラじゃ
ねーだろ

はは…
そうですね



二日前

ほろろ

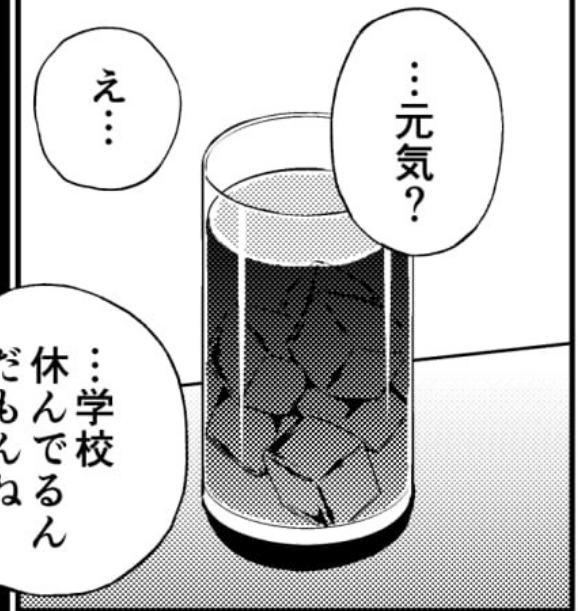


ごめん
急に



…うん





元気なわけないよね

え…

…元気?

…学校休んでるんだもんね



ごめん!!

ポタ君が決めた人なのに

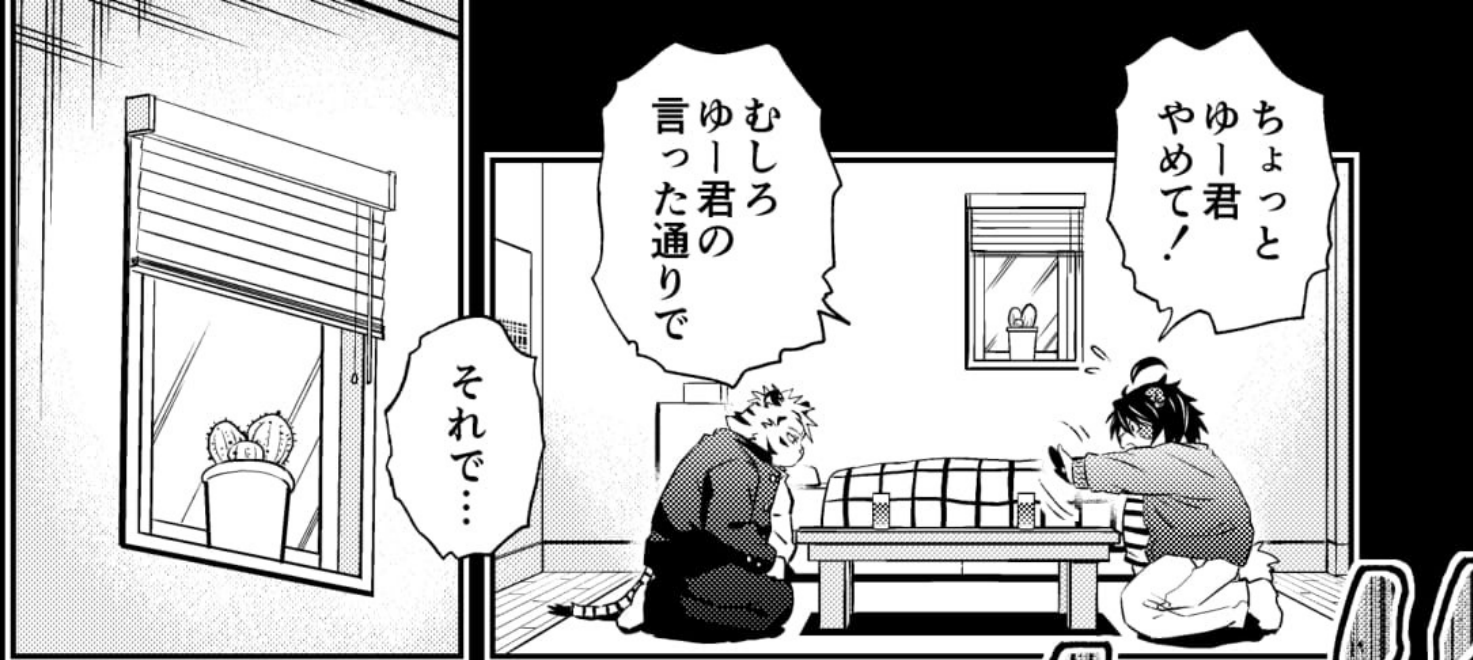
コーテツさんに会ったことも無いのに…

そのせいで学校まで休ませちゃって…ごめん!!

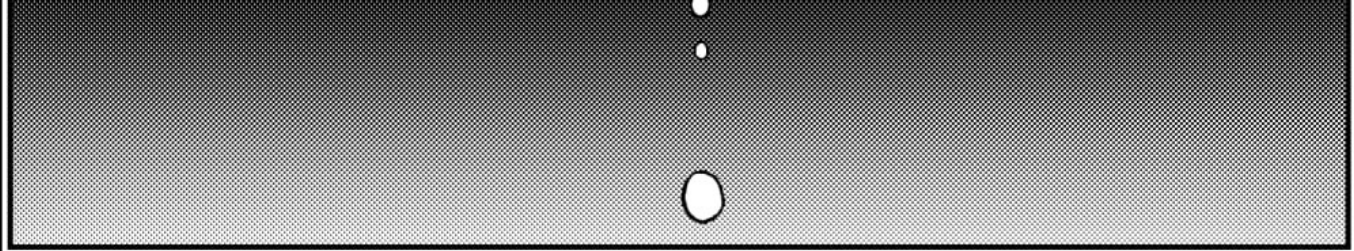


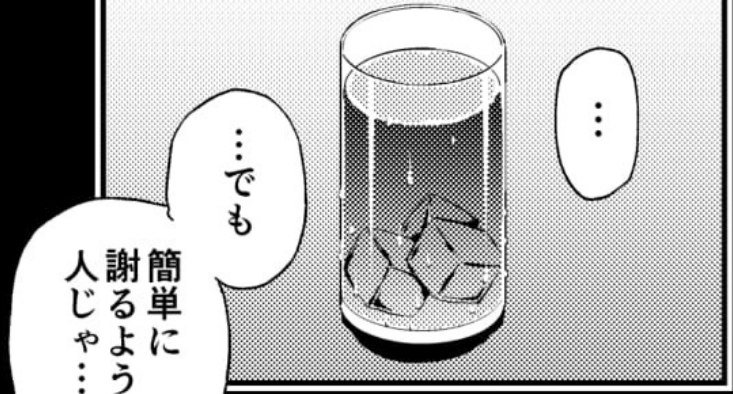
その…悪く言っちゃって…

…え?









…でも
簡単に
謝るような
人じゃ…

…



だから
教えて
ソイツに
ついて



…うん
分かってる



…

…
コーテツさん
には…

奥さんと
娘さんが
いるの…



少し前から
奥さんとは
別居中な上
離婚の話で
モメてて

そんな時に
ボクと
出会ったの

それで
半年以内に
決着を
つけるって
約束で――

それまで
そういう事は
しないって
約束で――

付き合い
始めたんだ……

でも……

奥さんとの
話は
どうなった
の？

：ねえ
コーテツ
さん……

ん？

ああ

弁護士にも
相談したけど
やっぱり
現状維持だな

結婚してると
社会的信用も
違うしな

え…

…じゃあ
今のは…

所詮
男同士なんて

お互い
気持ち良く
なりやそれ
でいいんだよ

え…

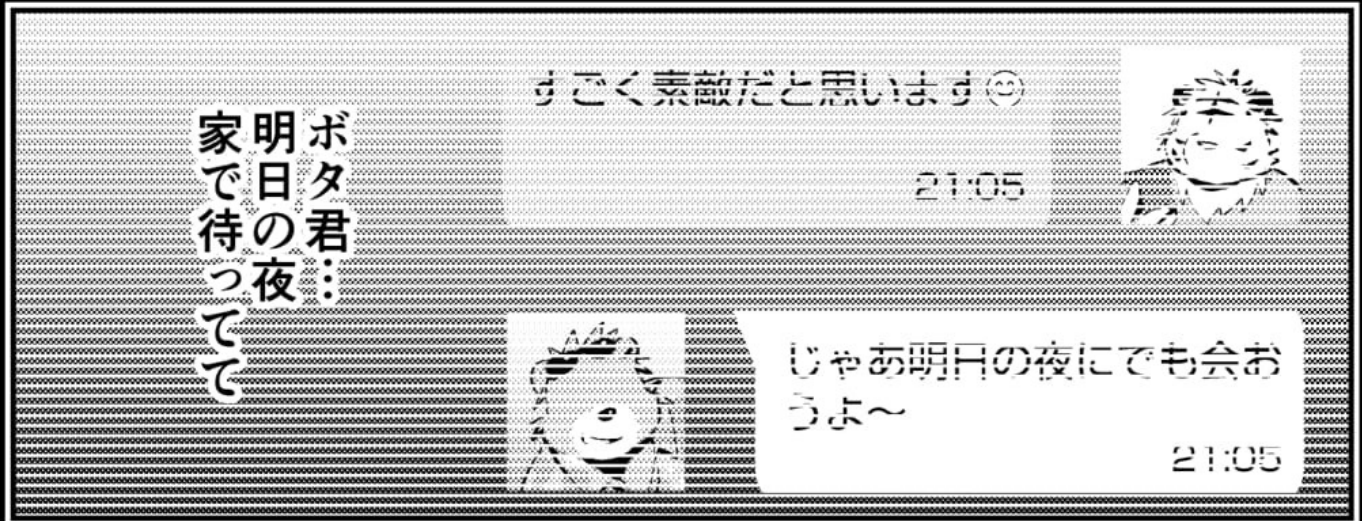
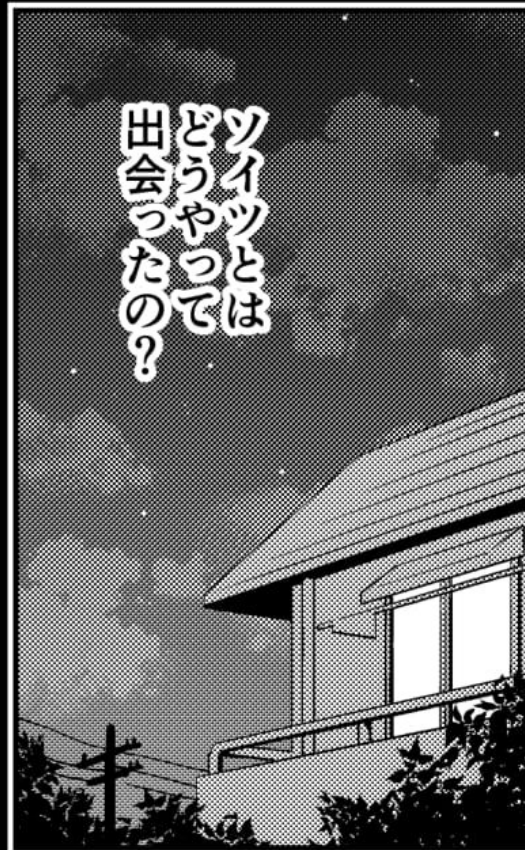
そんな
約束は…

はあ…
面倒くせえ
反応するねえ

そんな…
だって…

あー
面倒くせえ
帰れよ
もう来なくて
いいぞ

約束は守られなかった...





ケン君は週に何回くらいオナニーしてるのかな？

えーと…

言えない程してるのかな？

クソ…ッ
顔近づけるな
気持ち悪い



クソ…ッ



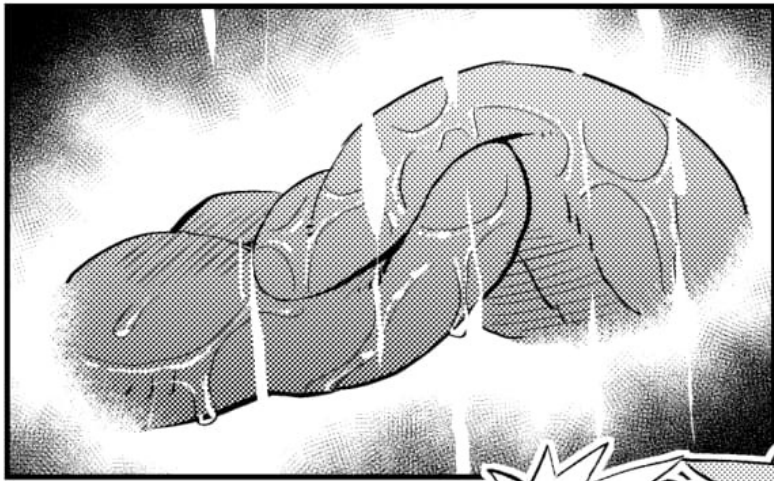
お腹キツイでしょ

カチャ



ファーストキス一回目だけじゃなく二回目もコイツだなんて…

クソ…ッ!!



耐えろ…
耐えろ…ッ!



感度
上げようか

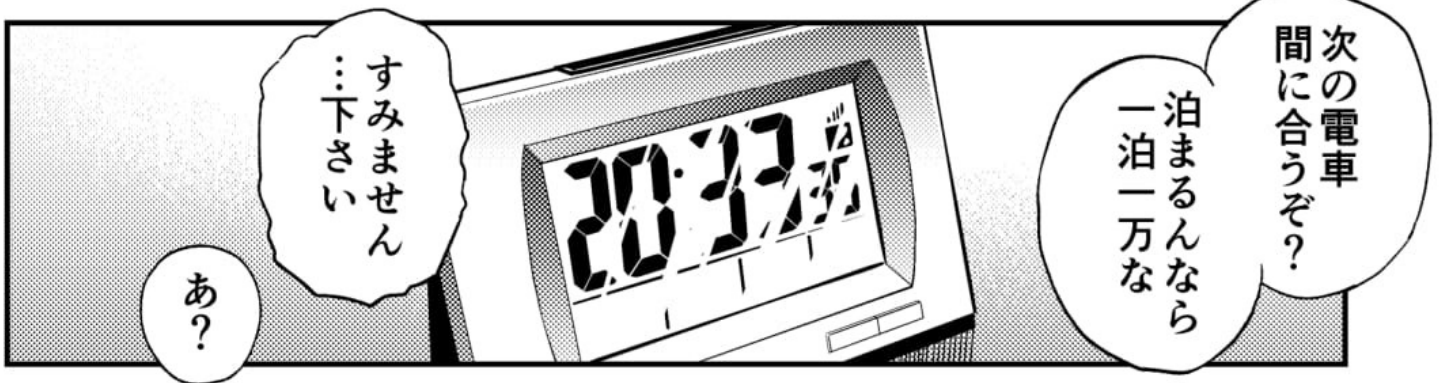
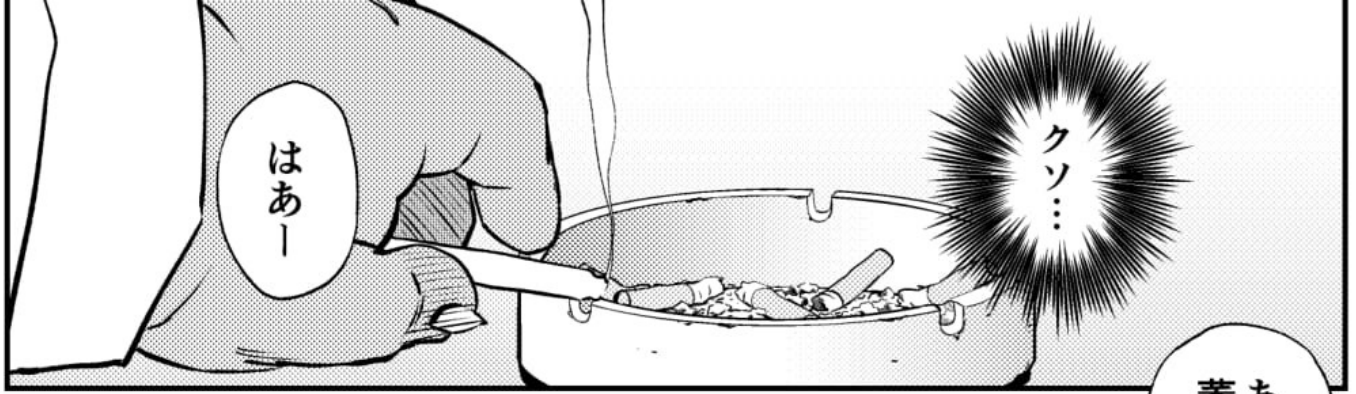


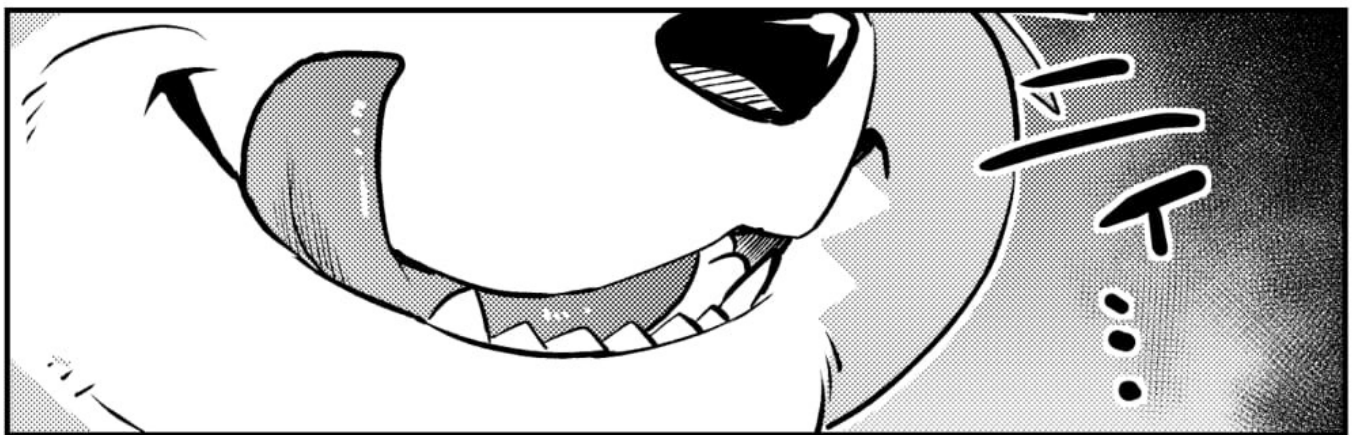
はあ…

はあ…

…











言う通りに
してりゃあ
良いんだよ



あれ...?



何でこんな
奴の前で



なんだよ
今の…



オレは
こんな声
を…!?



おい…
ウソだろ
…!?



チンポ
こんなに
してよお

ん、
やっぱり
さつき
飲まされた
アレ...



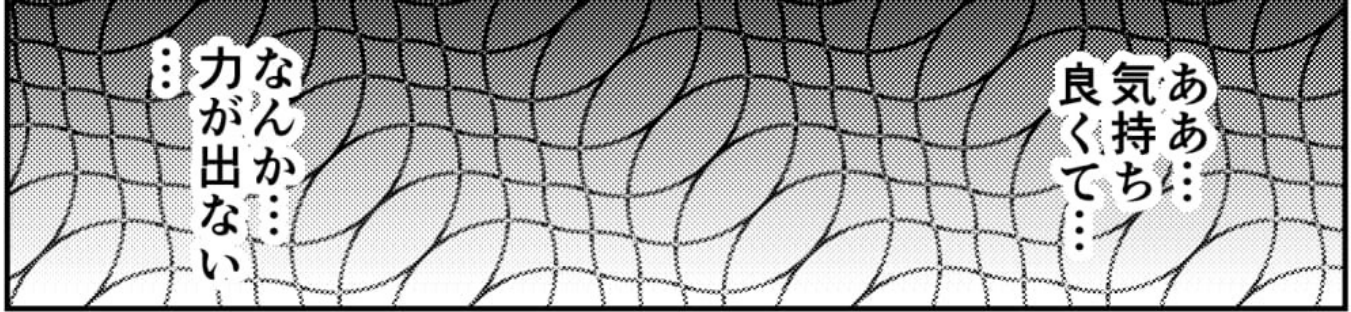
ほおら
男を捨てて
声出してみ?

ん、
オレに
身も心も
委ねてみ?



やべ...
なんかも全身
温かくて

ん、
気持ち...
良くなつて
きた...



ボタ君に
酷いことした
ヤツから…

フツキョ

あ♡

フツキョ

気持ち良く
されてる…

あ♡

フツキョ
フツキョ

ああ…

ん♡

フツキョ

フツキョ
フツキョ

気持ち良い…

あ♡

中で
動かれる度に

あ♡

幸せな気分が
やって来る…

繋がるって
こんなにも
気持ち良い
んだな…

フツキョ

あ♡

フツキョ
フツキョ

あ♡

フツキョ
フツキョ



どこに
出して欲しい
んだ？ン？



何だ？
言わないと
外に出し
ちゃうぞ？

ひとつに
なりたい…

ン？
ふっ
ふっ

首振るだけじゃ
わかんねーぞ？



下ろさ…

一瞬でも
離れたくない…



イヤだ
—
そんなの
寂しい…

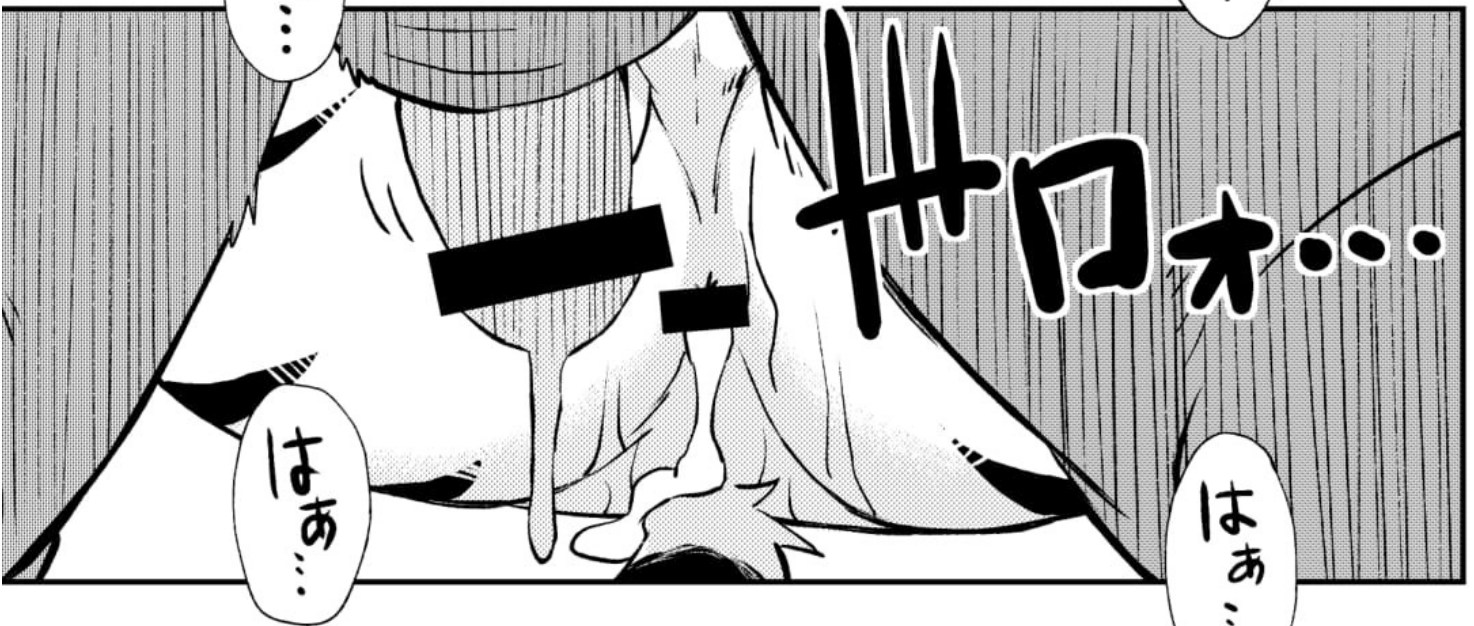
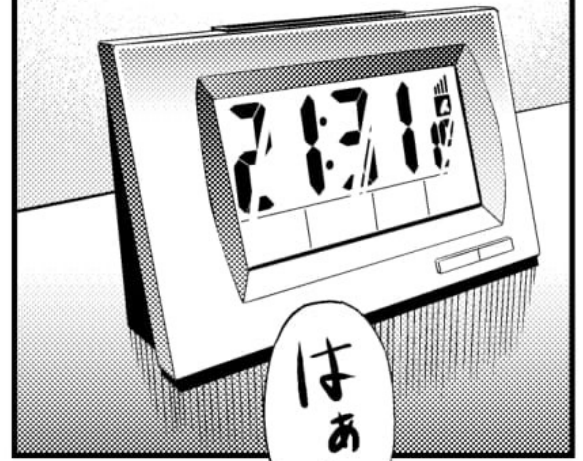
中に…

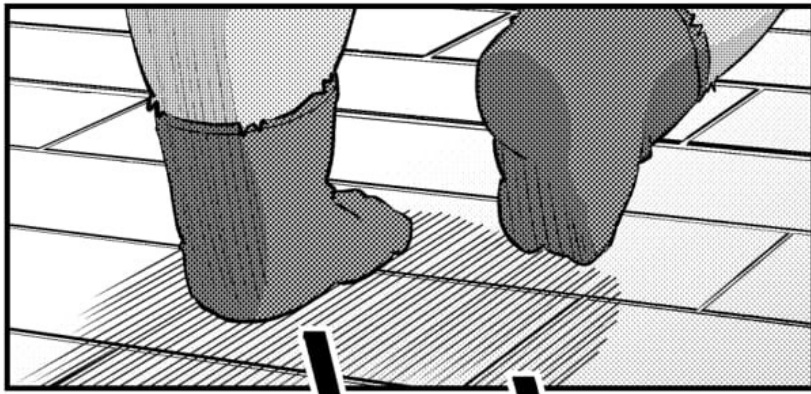


イイ子だ
たっぷり
仕込んで
やるからな

肉体も…
体液も魂も
全部…全部

ぐちゃ
ぐちゃ
ぐちゃに
混じり合
いたい…



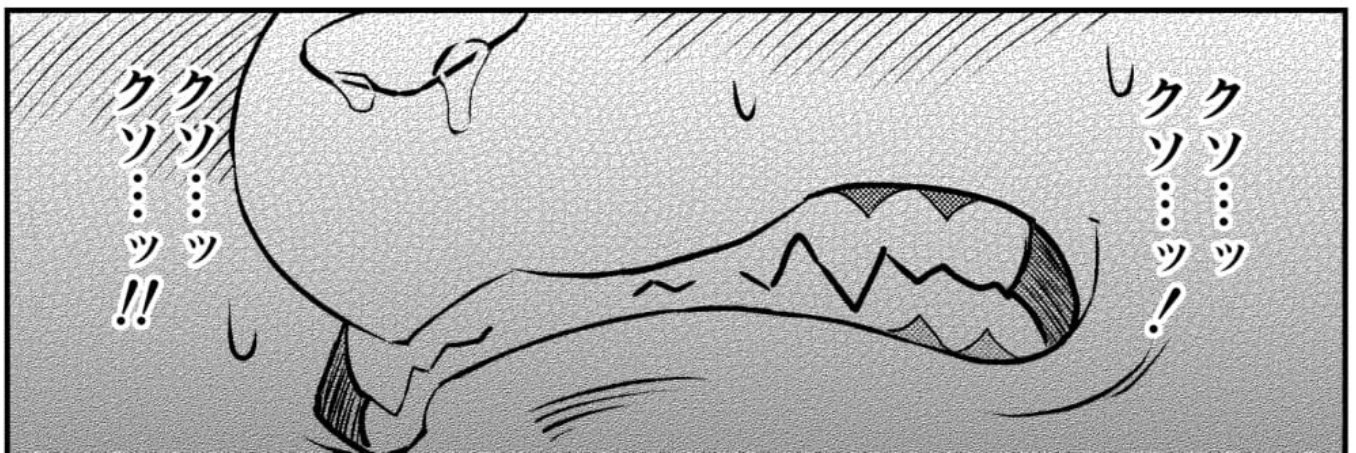


ケン君?
トイレ
行くから
離してくれる?

オレ...何やってんだよ...



オレ...身も心もアイツの良いうように...





途中から
変な気分になつて...

オレの体が
アイツに

体が
熱くなつて

どうしても
我慢
出来なかつた

あの変な
薬の
せいだ...

もつと

また抱いて
貰えるのを
待ってる...

気持ち良くな
りたかつた

あの変な
薬の
せいだ...

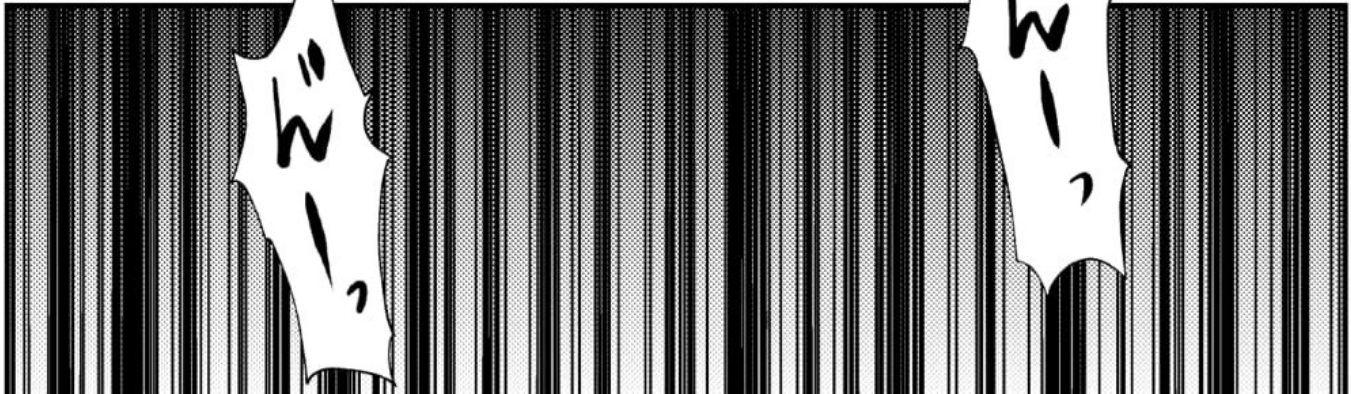
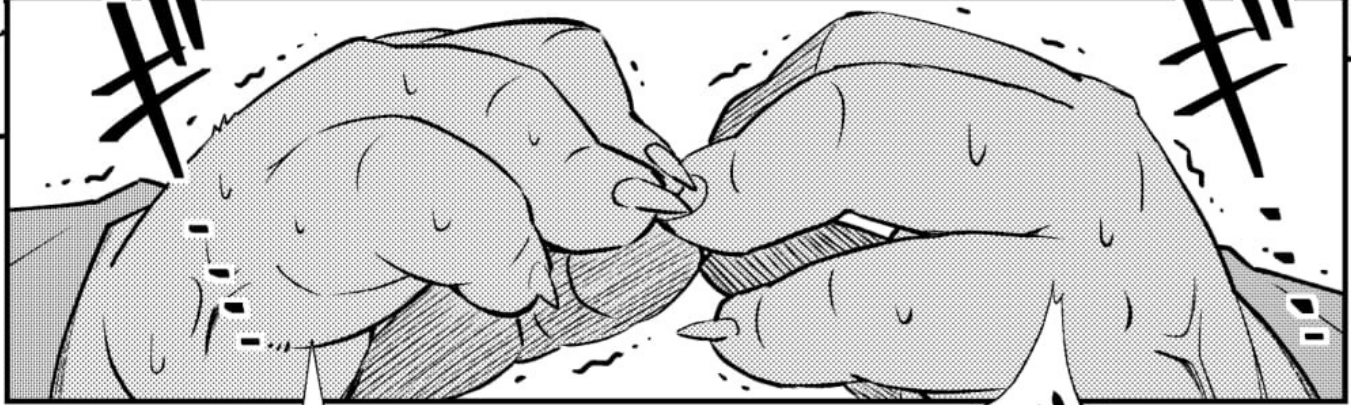
クソ...
頭の中の
霧が
晴れない...

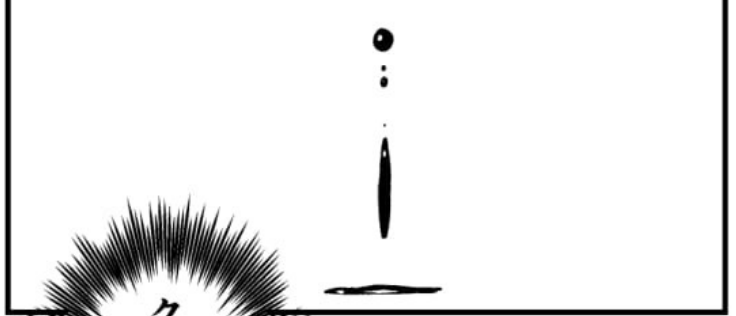
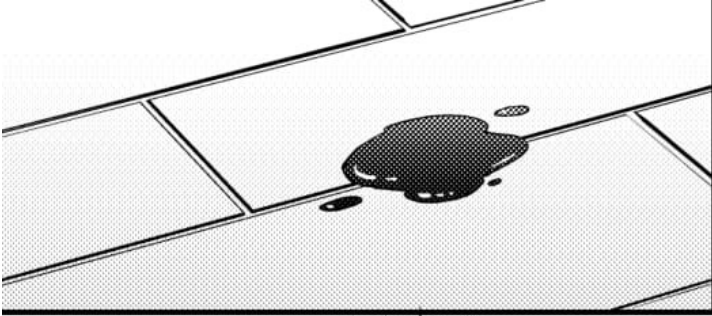
あの
変な
薬の
せいだ...

クソ...
クソ...
体が重い...
クソ...クソ...
クソ!!

オレ...アイツと一つになりたいなんて...





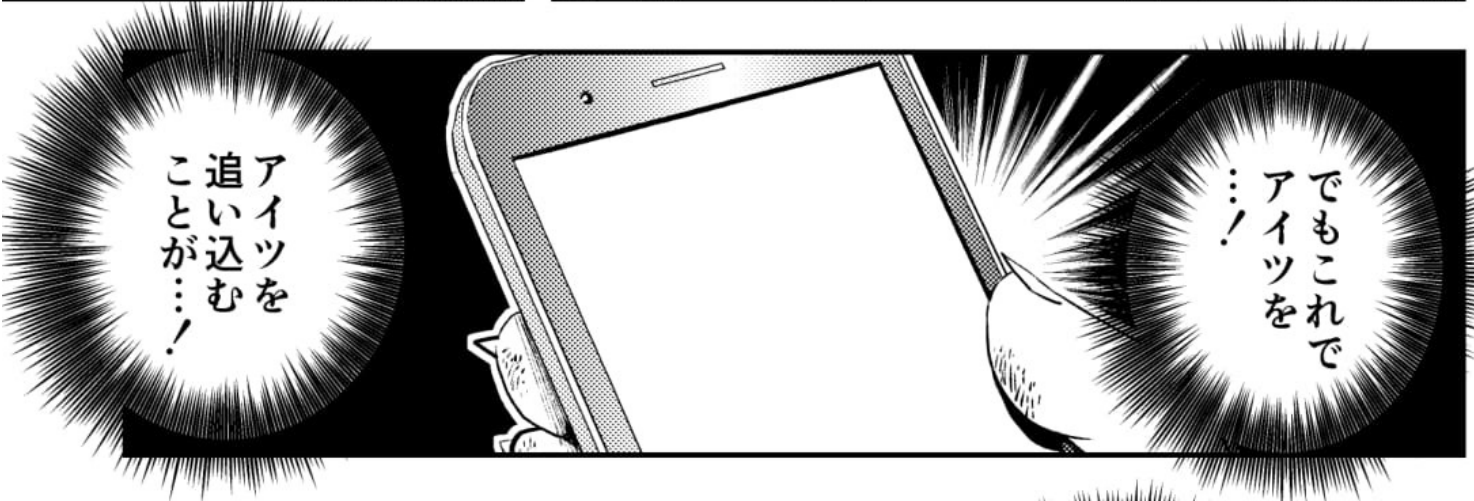


ここまでの
つもりじゃ
なかった…



クソ…!

クソ…!

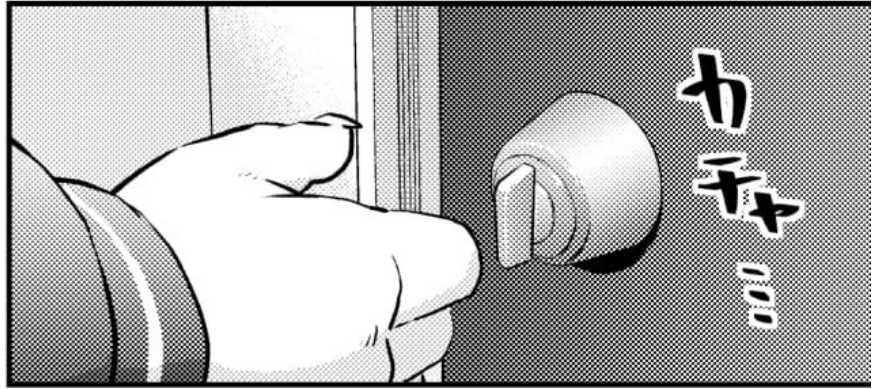
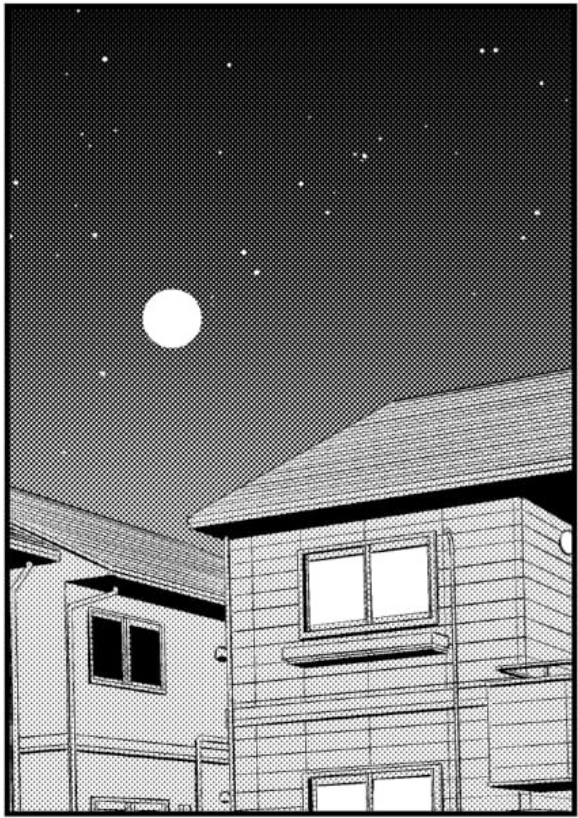


アイツを
追い込む
ことが…!

でもこれで
アイツを
…!



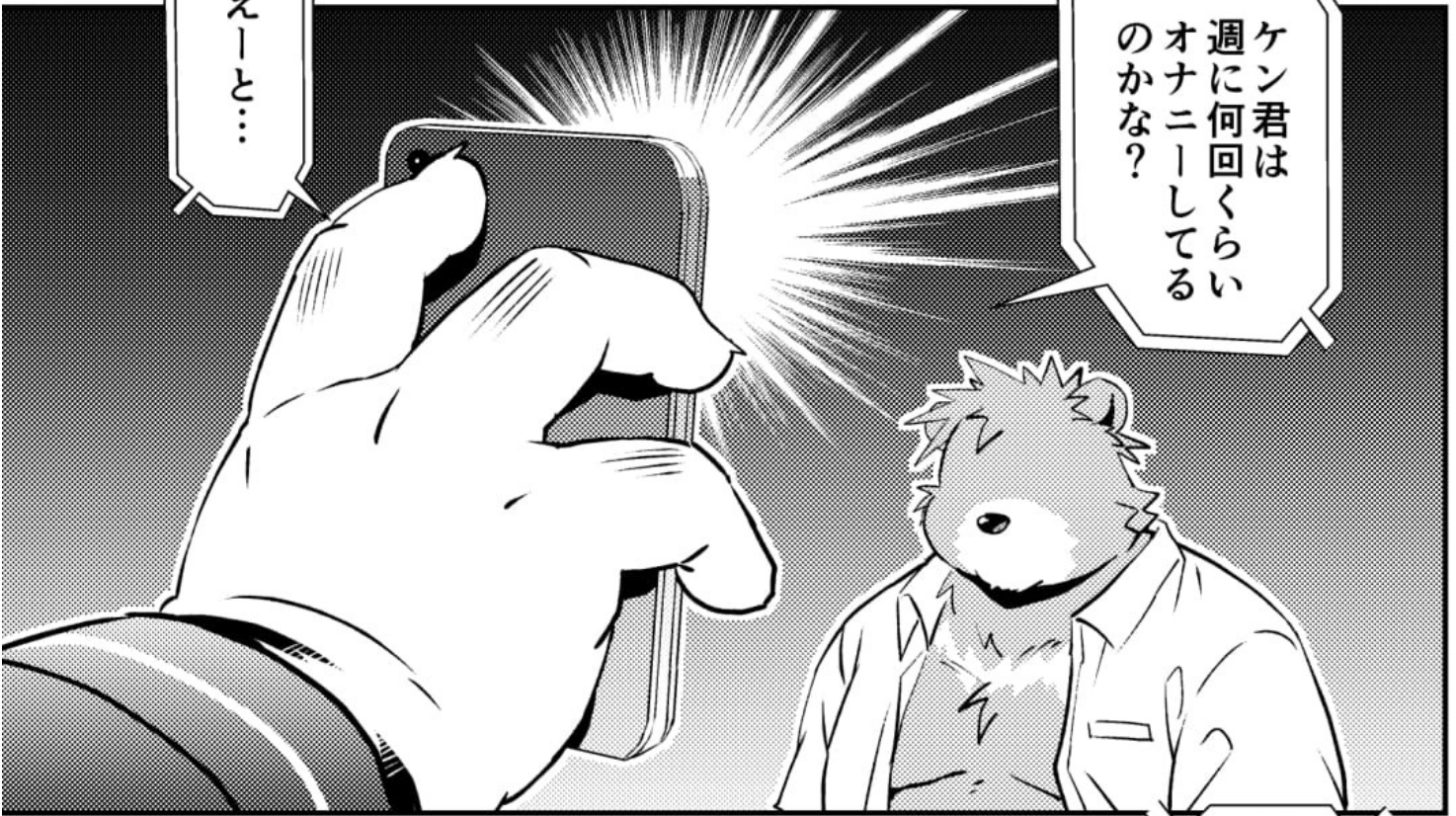
…!!
出来る





えーと…

ケン君は
週に何回くらい
オナニーして
るのかな？



お腹
キツイでしょ

言えないほど
してるのかな
？





やだなあ
どうしたの？
ソレ

…何の
マネかな？

感度
あげようか



バッグの
隙間から

撮らせて
もらいました

これ
感度良くなる
サブリ

ほれ

…え？



…



それと
アンタの
ケータイ

いじらせて
もらいました

何か
見つかればと
思いました

やっぱり
ロックが
掛ってました



この
ロック画面

女の子と
その隣は母親
ですかね？



実は
オレの友達に

アンタと関係
を持っている人
がいるんですよ



…
何か
おかしいか？



だから
聞いているん
です



この子が
アンタの
娘さんだと
いう事も

その
隣の女性が
別居中の
奥さんだと
いう事も…！

もし
この撮った
動画を

ネットで
拡散したら
…？

アンタの
会社の人たちは
もちろん

別居中の
奥さんの
目にも止まる
でしょうね

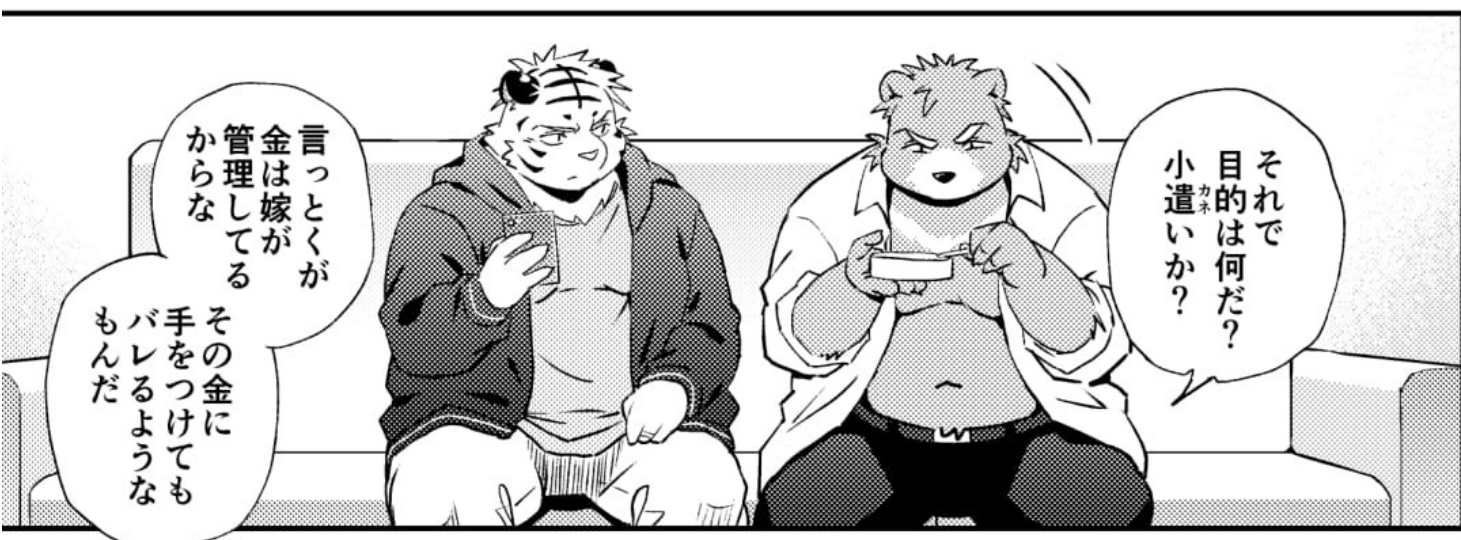
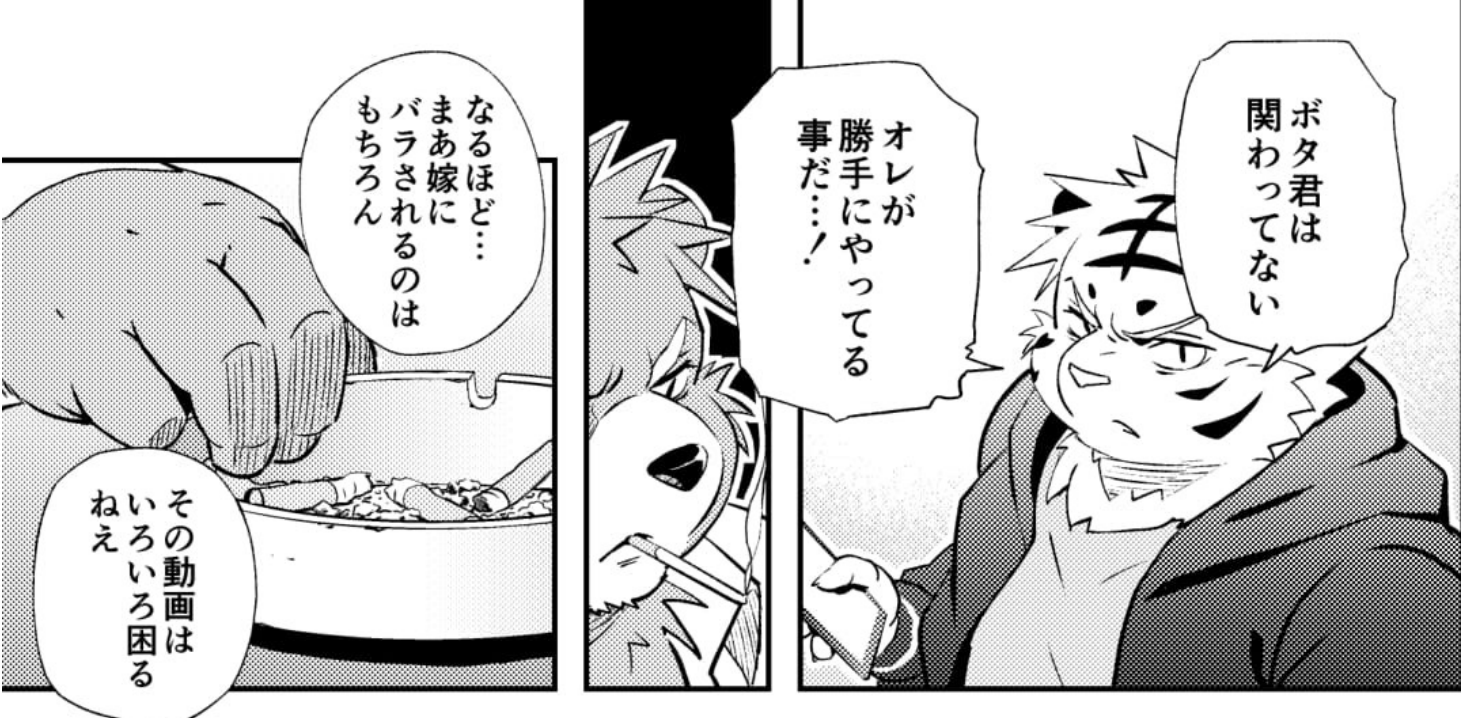
…

ふー…
なるほど
キミが

ボタ君が
いつも話してた
『ゆー君』か

…ボタ君と
計画したの？

こんな
オッサンの
為に？







あボタ君
起きてた？
…うん
…何とかね

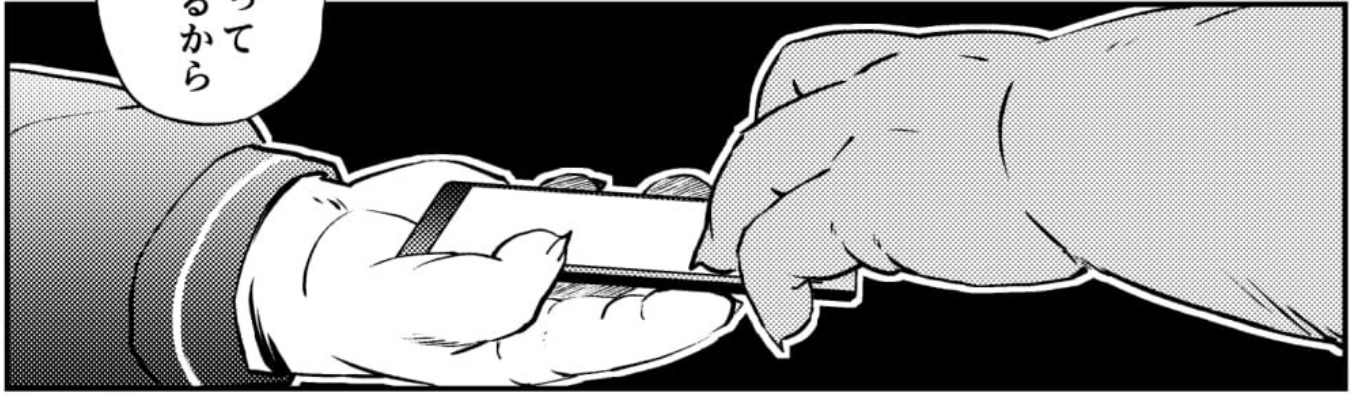
今替わって
謝らせるから



ボタ君が
家で待ってる
まずは電話で
謝れ

いいよ

…ああ
わかった



だから
心を鬼にして
突き放した…
愛するが故
だよ

…それは
言い逃れ
だよ…



オレも最初は
ボタ君に
本気だった
んだよ

当然
嫁との
別れも頭を
過ぎったよ

でも男ってよ
出·し·ち·ま·う·と
冷·静·に·な·れ·る
だ·ろ·？

ボタ君だって
こんなオッサン
とじゃ将来
不安だろ？



ボタ君は
とんだバカに
好かれて
るんだな

えっ？



...アッ?

アッ



馬鹿か
テメエは…!



要求飲ます
前によお…!



…馬鹿が
!!

交渉材料
渡したら
ダメだろう
が!!



…馬鹿が
!!

動画なんて

消して
しめて
終わら
だ

動画を端末から
削除しました。
OK

ご苦労様
でした



ガチホモ動画を
拡散したがる
ノンケが
どれだけいる？



さっきの動画
ネットで拡散する
なんて吐かして
やがったな？

動画の中に
拡散されるような
笑いの要素でも
あったのか？

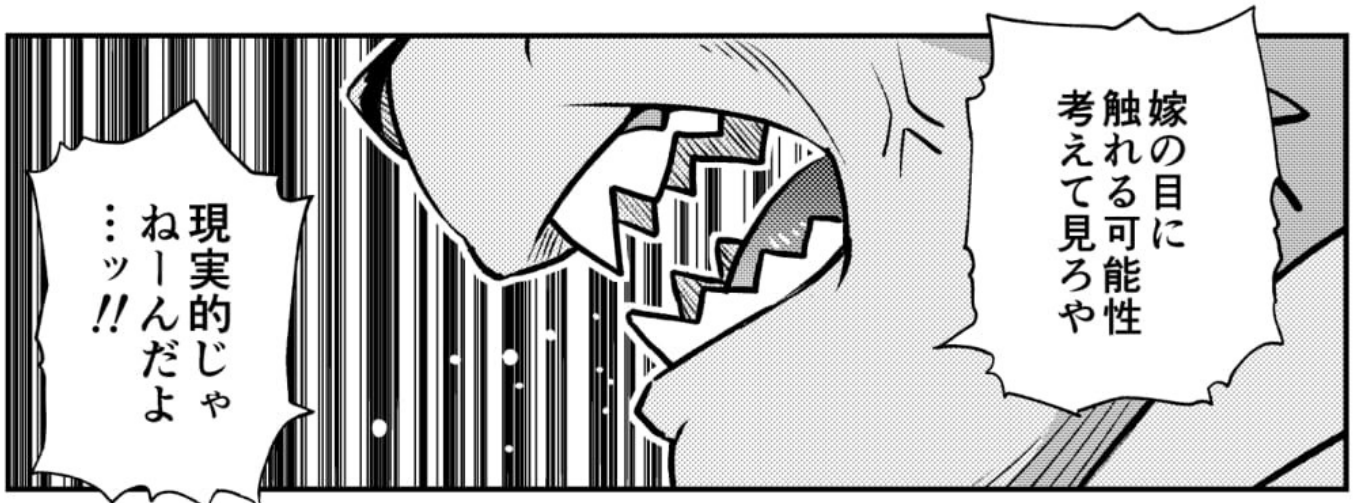
え…ウソだろ…!?



目に付く
ような所に
上げて

不適切な
コンテンツで
削除されて
しまっ
終えだよ

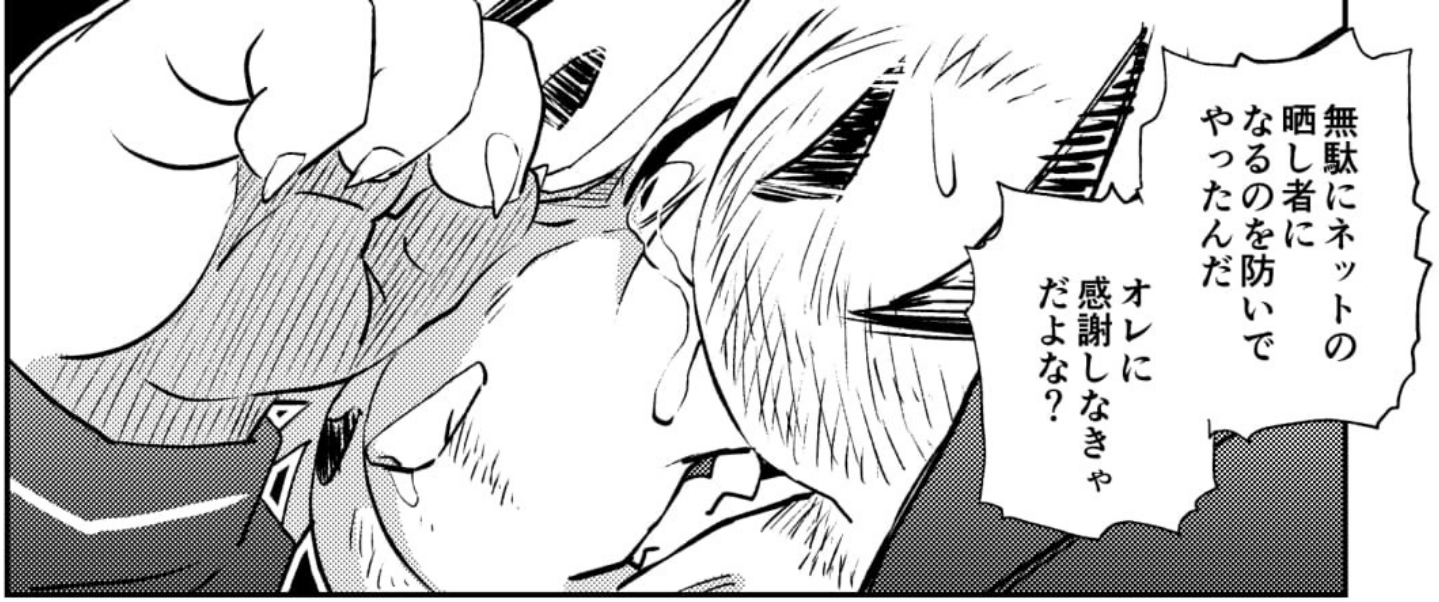
何やってんだよ…!?



嫁の目に
触れる可能性
考えて見ろや

現実的じゃ
ねーんだよ
…ツ!!

何やってんだよオレは…!?



無駄にネットの晒し者にやるのを防いでやったんだ

オレに感謝しなきゃだよな?

ボタ君…ごめん…



恥ずかしいことされてる所を撮るのが好きみたいだから

オレのケータイで

恥ずかしい写真いっぱい撮ってやるよ

オレ…ダメだった…



カチャ

安心しろよ
愛の確認にしか使わねえからよ



ちよつと
…!!

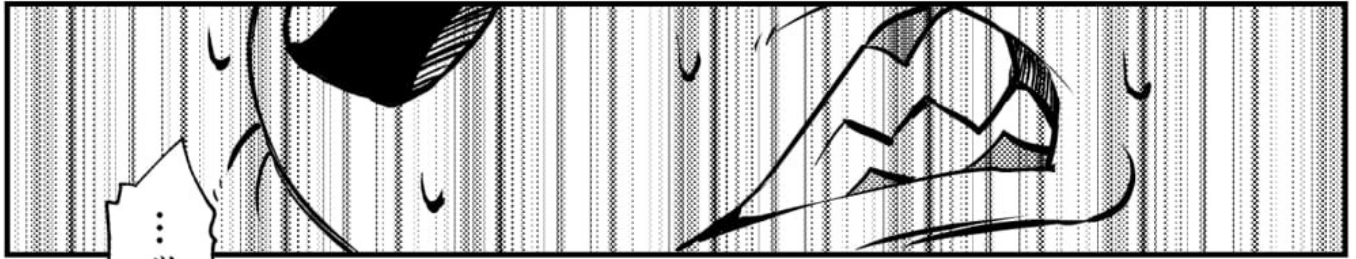
何やって
るの…!?

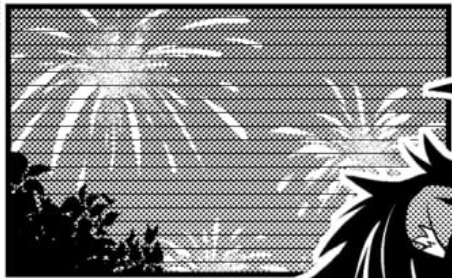
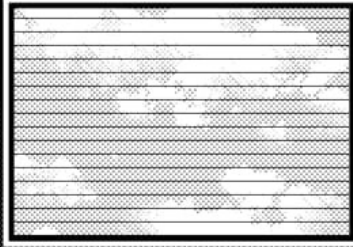
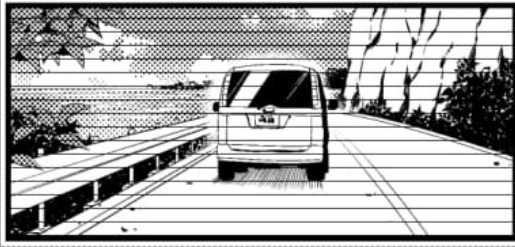


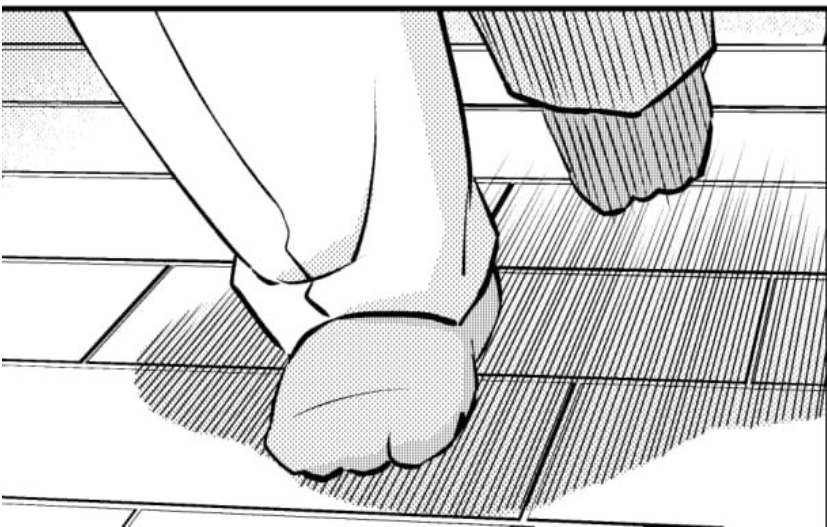
ゆー君…
大丈夫!?

どうい
う事…!?











クッソ
ジジイッ!!!

ガキを
ナメるなッ!!!



待てや
コラアッ!!

ボタ君
走って!!



こんの
クソガキヤア
アアアアッ!!!



体力ねえな
クソジジイ!!

クソツ
待ちやがれ!!



クソツ...

ハア...
ハア...

さようなら



ハア...

ハア...



ボタ君は
...

ハア...



何で
あの場に?

ハア...



ハア...

ハア...



コーテツさん
何するか
分からない
人だし

ゆー君の
言った通り家で
待ってたけど

全然
連絡ないし
心配に
なってる

コーテツさんの
家に向かって
たの



部屋の前に着くなり
中から騒がしい音が
聞こえて来たから

ゆっくりドアノブ
回してみると
何故か鍵が開いてて



やつときた
電話も途中で
切られて

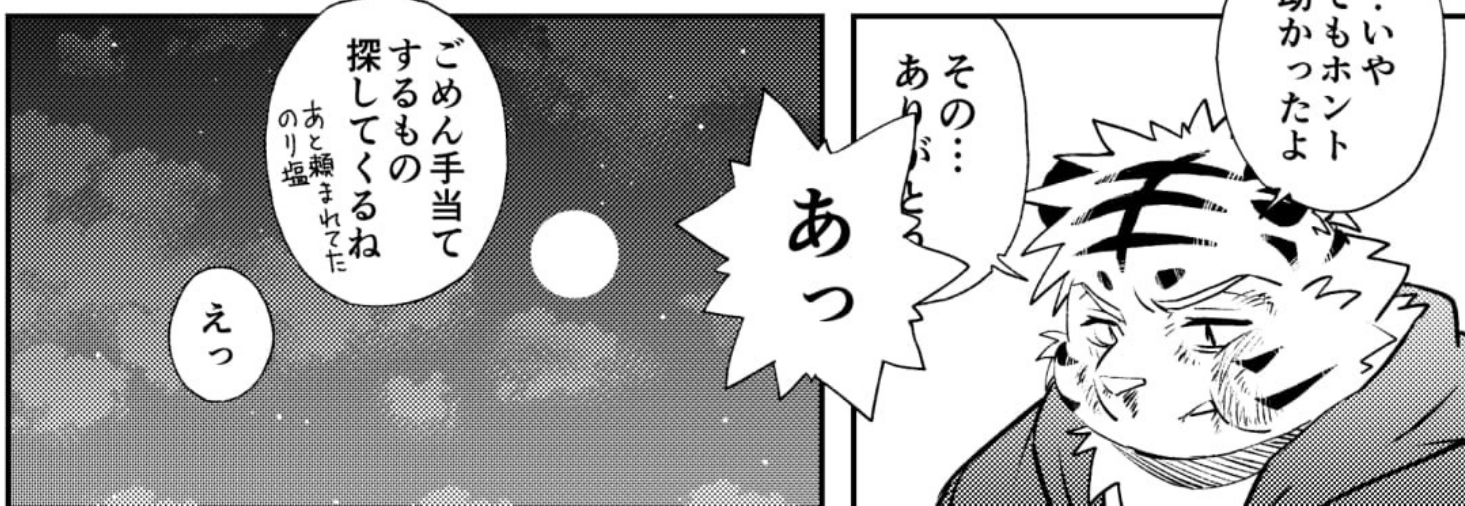
とにかく
部屋に
急いだんだ



それで中に
入ったら

ゆー君
すごい事に
なってるし
ホントもう

ああ
念の為に鍵開けて
おいたんだって



いや
でもホント
助かったよ

その
あり

あつ

ごめん手当て
するもの
探してくるね
あと頼まれてた
のり塩

えっ



いやそんな
大丈夫だから

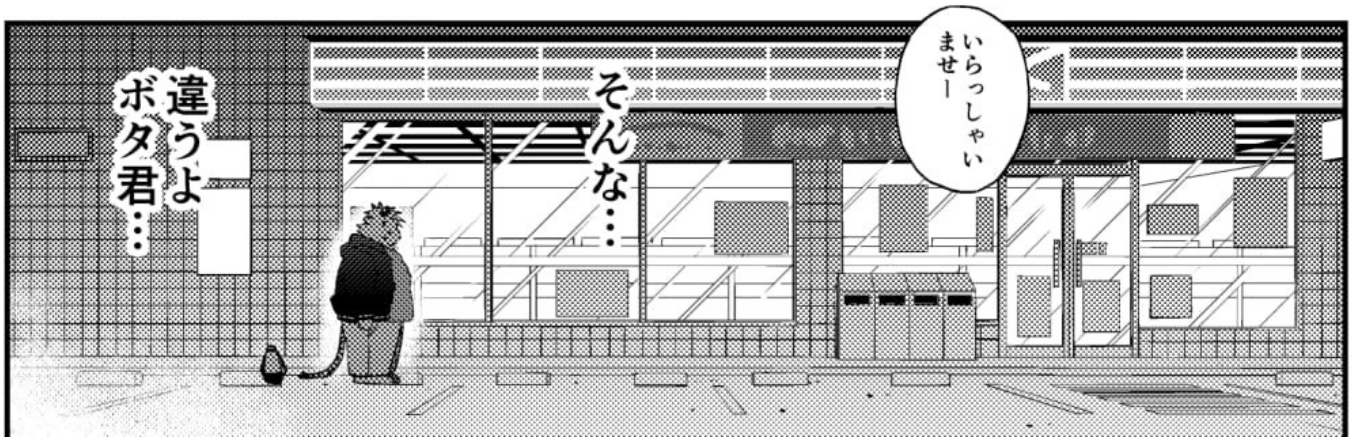
ゆー君



ありがとうね



...



いらっしやい
ませー

そんな...

違うよ
ボタ君...



誰も助けに入らずそのままオシオキされちゃう
展開の方がエロ的には良いんだろな～
うーん…でも話も前に進めたいし
うーん…と悩みました。

あとこの話の続きを描くのが4年ぶりということで
再録の部分と絵柄が変わってて見辛かったかと思います。
すみません！

それではまたどこかで！

スペシャルサンクス：
「いぬさわさん」
「もけさん」



風に吹かれて

発行 ぽぽでいらん
編集 ぽぽんパペオン
発行日 2018年4月30日
連絡先 pponvii@gmail.com

無断転載・複写・複製は固く禁じます。

心ちゃんね

今日も塾サボって
市の卓球クラブ
行ってたみたい…

成績落ちて
ないんだから
良いじゃない

それでは次の
ニュースです
今朝6時半頃

ちょっと待って
それじゃあ
ただの現状維持
じゃない

何の為に
高い月謝
払ってると
思ってるの!?



どーよ
落ち着いた?

22:05

既読
22:05 全然



まさか心美も明日から
来なくなるとかないよね?

22:07



なんか段々落ち込んできた



もー!!

22:10



夕方は冗談だって(笑)

22:11

一方その頃…



のり塩
おっそいなや…

Presented By

POPO DYLAN

『風に吹かれて』

Kaze Ni Hukarete